5－7　テキサス大学オースチン校

(University of Texas, Austin)

5－7－1　大学と分析対象の概要　　図TX1~13

創立1883年のテキサス州の州立大学。学生数５万人に近い巨大研究大学の一つで、医学を除いてあらゆる分野をカバーする総合大学でもある。

分析対象の地区は、州都・オースチン市街の北辺を限る位置にある。ここは大学のメインキャンパスであり、一部研究実験施設などを除いてすべての施設が集まっている。キャンパスは大学発足の当時、歴史的コアと呼ばれる16haほどのブロックであったが、その後北と東に公道を越え拡張を続け、現在はこの地区だけで総計144haに達する。大学の空間的な中心は今も歴史的コアであり、管理、共用施設と教養諸学部が置かれている。専門学部や大学院、大規模スポーツ施設などは周辺部に配置されている。

全体計画は　Cass Gilbert(1859-1934)、Paul Phillipe Cret (1876-1945)　などが担当してきた。分析の期間の大半は、クレの計画を基礎に整備が行われた。1950年代ぐらいまでに建てられた建築は多くがスパニッシュコロニアルかイタリアネオルネッサンス風の建物である。

5－7－2　変化の概要　　図5-26~28

（1）1900年

原初のキャンパスの姿。周辺は基本的に田園的なオープンスペースが広がる。敷地はほぼ400m四方の正方形の街区で、現在、歴史的コアと呼ばれている。全体にカレッジヒルといわれた緩やかな丘状の地形をなす。その中央のピークに大学本館（オールドメイン、1899）が孤立するように建ち、周囲には、境界は曖昧だが大きな領域が形成されていた。また、この建物の周辺に配置されていた寮（Bホール、1890）と化学のラボ（オールドケミカルラボ、1891）は本館と距離を置き、相互に独立した領域を形成している。いずれも各建物のアクセス路が付く前面には表の領域が曖昧に形成されている。

（2）1930年

キャス・ギルバートがオールドメインの二つの直交軸を用いて全体を編成する計画（1909）を立案していたが、この段階でもオールドメインを中心に、各建物は田園的な構内のオープンスペースの中に散開している（バトルホール（1911）、サットンホール（1917）、生物学棟（1925）、ギャリソンホール（1926）、グレゴリージム（1930））、物理学棟（T.S.ペインターホール、1933）、テイラーホール（旧工学ビル、1934））。バースホール(1908)のみ、構外の街路に面し建つ。

各建物のアクセス側には前庭様のオープンスペースの弱いまとまりがあるが、領域全体としては曖昧な境界の田園的なオープンスペースの中に建物が孤立した建つという編成である。

（3）1933年

ギルバート案に代わり、クレの全体計画（1933）に従い建設が始まる。大きくは構内北、西、東の三辺に沿って建物が新設され、オールドメインを囲む大きな（半径100～150m）円弧を描くオープンスペースの基本単位が形成される。各建物は比較的近接し、部分的により小さな囲みによるオープンスペースのまとまりが形成されるものの、多くの場合入り隅が閉じられず、また囲みの外へ連続してゆく外構や完結的な建物形態などのため、オープンスペースの輪郭は常に不明快である。

オールドメインを貫通する縦横の直交軸に沿った整備が若干進み、北側にはギヤリングホール（元ホームエコノミックス棟、1933）が軸上に建てられ、さらに北に伸びる拠点となるとともに、オールドメインを囲むオープンスペースの一環となっている。

（4）1942年

クレの計画の一部として歴史的コアの中にミュージックビル（1942）が完成し、メインビルを囲むオープンスペースの南側の緩い境界を形成する。また、現在のUTタワー（1937）が完成し、それを貫通する主軸に沿った北と東の地区で整備が進む（石油工学ビル、1942、ショックビル（元化学工学ビル）、1942)など）。

（5）1955年

歴史的コアの南側の主軸に沿って一連の計画が実施され、メインビルを囲むオープンスペースのまとまりがほぼ完成すると同時に、軸が貫通する中規模なオープンスペースのまとまりが形成される。これは、北半分のオープンスペースの円弧状のまとまりと対照的にメインビルに向けての軸性がより強く、メインビルの前面の横長の前庭的広場とともにT字型のオープンスペー

スを形成する。

メインビルに向うオープンスペースの両側の建物は、中庭を主軸側に開放し、凹凸の激しい面を向けるので、オープンスペースは軸に沿って連続的に囲まれた－挟まれた印象が弱い。また、中央部が芝生や高木で植栽されるなど、連続する街路としての性格は弱く、広場的である。どちらにせよ街路というより、田園性の強い特性である。

コアから離れた部分で、主軸に沿った整備が引き続き行われるが、上で述べられたものと同様、原則として連続的な街路のオープンスペースは形成されず、緩やかに囲まれたオープンスペースが街路に向かって開かれる（アンナ・ヒス・ジム（1931）、薬学棟（1952）、学生健康センター（1950））。

5－7－3　変容の特徴と空間編成の形式

－変容の特徴　　図5-29~34

変容の過程では、囲まれたオープンスペースを軸によって統合してゆく体系性が特徴であるが、同時に、完結的な形態の建物を距離を保ち配置し、囲われた広場も入り隅を開放、軸に沿って並ぶ建物は凹凸のある面を向けるなど、明確な輪郭を持った閉鎖的なオープンスペースのまとまりを形成する事を避け、構内全域に広がる田園的オープンスペースの一体性を損なわないように変容を遂げる。

軸の体系は、おおむね「T字形式」を基本的単位とし、その横断軸を別の単位の軸に交わらせ、展開してゆくものである。

前半（戦前）は、歴史的コアの北半分の区域で、タワーを大きくとりまくようなオープンスペースが形成される。個々の建物は中庭形式もあるものの、おおむね一文字型の完結的な形態が多く、田園的なオープンスペースの中で独立的な領域を形成する。

後半（終戦前後）は、歴史的コアの南半分の区域で、主軸に沿ったオープンスペースのまとまりを形成してゆくが、前半と同様、明確な囲み－挟み込み－の形式は回避され、植栽などからみても街路としては都市的特性が曖昧であり、細長い広場様のオープンスペースとなっている。

一方、歴史的コアの外側では、UTタワーを起点とする十字交差する二本の主軸を東と北に向け伸ばし、それを基準にキャンパスが成長してゆく。その

過程でも、個々の領域が連続的に続く街路や明確な輪郭の広場を形成しないように相互の距離と配置を考えながら独立的に建物が挿入されてゆく。囲みは厳密な対称性、軸性があることを除けば基本的にオープンクワッド(2章参照）であり、オープンスペースのまとまり相互が緩く連続してゆく。軸に沿って連続するファサードも見られず、街路様のオープンスペースは形成されない。囲繞性あるオープンスペースのまとまりはすべて開放的にされている。

二領域性も曖昧である。裏の領域はほとんど見られない。付属屋などを建設する必要があれば表の田園的なオープンスペースを区切る要素として他の本館建物と同様に扱われる。

要素レベルの個々の領域は、囲まれた中庭などオープンスペースの明確なまとまりが作られ、建物周囲にも他と関係しない独立的な領域を形成することが多い。それらはおおむね植栽が施され、田園的な特性を示す。その純粋かつ典型的な例がメインビルである。最後まで周辺に広くオープンスペースが確保され、田園的オープンスペースの中に独立する建物としての特徴を保った。

「T字形式」のスケールはローマ大の例と近い。

73m(88m)×135m（横断軸方向）、66m×223m程度（主軸方向）。

－空間の編成形式　　図5-25

地形的に明確な中心を持つ広大なオープンスペースの一体的領域としての歴史的コア。その中心に主軸の交点を定め、T字形式による空間編成の体系が展開。その後のキャンパス全体の変容を規定し、空間を統合。

主軸と横断軸上の区域は比較的囲繞性が強く、都市的に整えられるも田園的な特性が基本。要素レベルでは境界の曖昧な独立的な領域が散開。裏の領域は通常の建築に取り込まれ、田園的なオープンスペースから基本的に排除される。

5－7－4　宮殿形式の検証

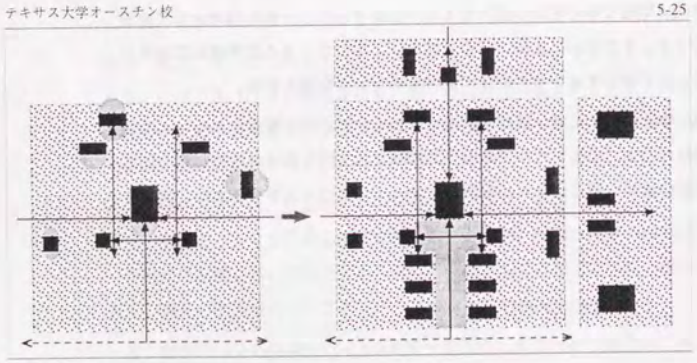
－田園的オープンスペースの上に展開する宮殿形式の体系

一体的なオープンスペースの広大な領域の中に、ローマ大、東大内田期と同様、T字形式の編成単位を基礎にした軸と中心を組み合わせた体系によって全体は統合され、一体的キャンパスが形成される。宮殿形式の体系的な適用形態である。とくに歴史的中心部はT字形式によって規定されたオープンスペースの形成が見られる。構内全体もそこから発する主要な軸によって編成されている。

しかし個々の建物はナッソーホール型の独立的な編成領域をもち、オープンスペースは、原則として田園的オープンスペースで一貫する。

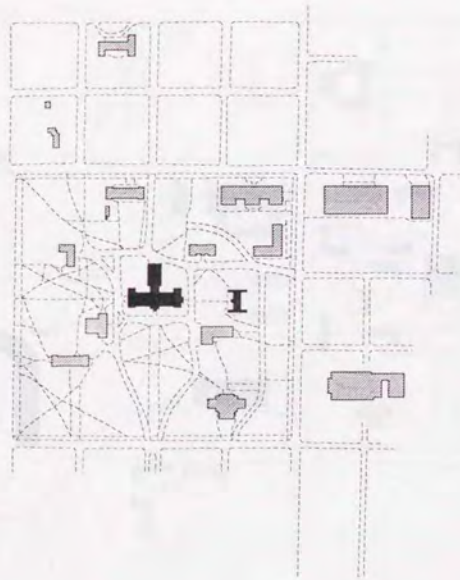
大学の立地する環境自体が基本的に田園的なオープンスペースであり、大学の外部世界を連続的に大学内に導入する宮殿形式を適用することは、もともと田園的特性の大学の領域に同じ特性を重ねることになる。その結果、明確な囲い込みを作らないオープンクワッド様の広場、連続したファサードのない軸性の弱い広場様の街路が形成される。

テキサス大学オースチン校 5-25

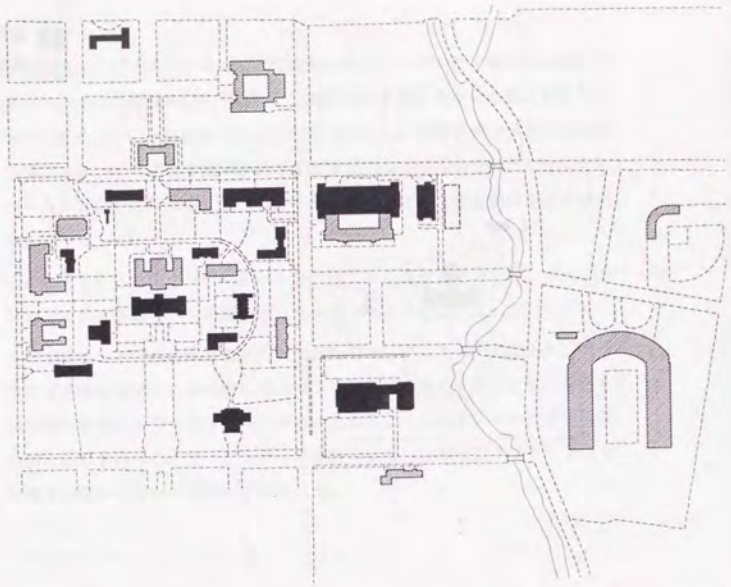


テキサス大学　配置図-1 5-26

1900年 1/7,500

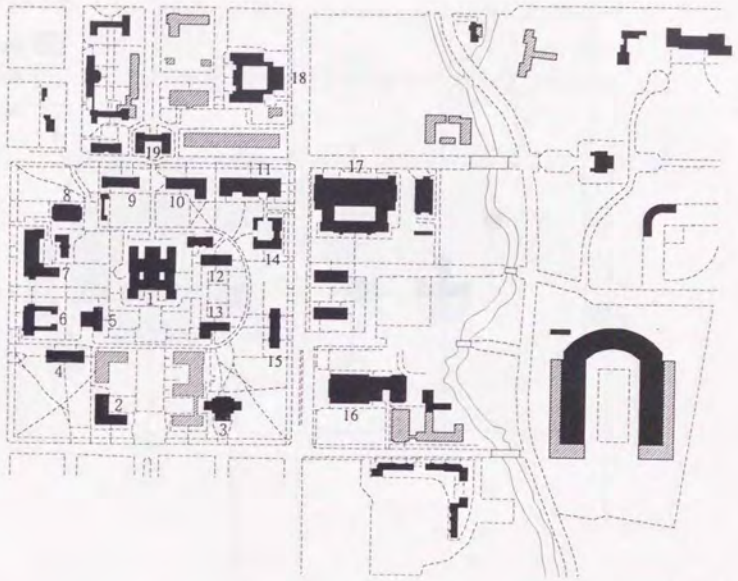


1930年 1/7,500



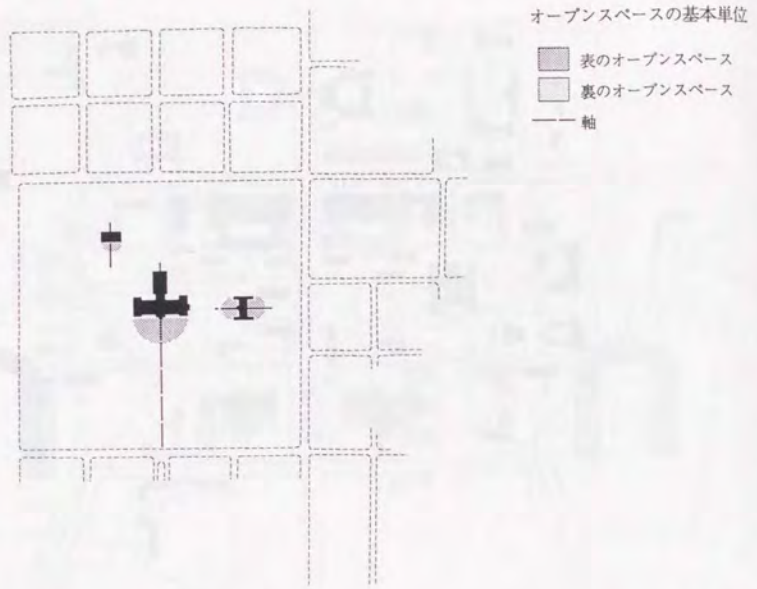
1933年　1/7,500

1942年　1/7,500



1955年　1/7,500

1　大学本部
2　ミュージックビル
3　法学
4　サットンホール
5　バトルホール
6　建築
7　大学ユニオン
8　ホッグ記念博物館
9　生物
10　物理
11　化学
12　地質
13　ガリソンホール
14　ブレス
15　ワグナーホール
16　グレゴリージム
17　工学
18　女性用ジム
19　ホームエコノミックス



オープンスペースの基本単位

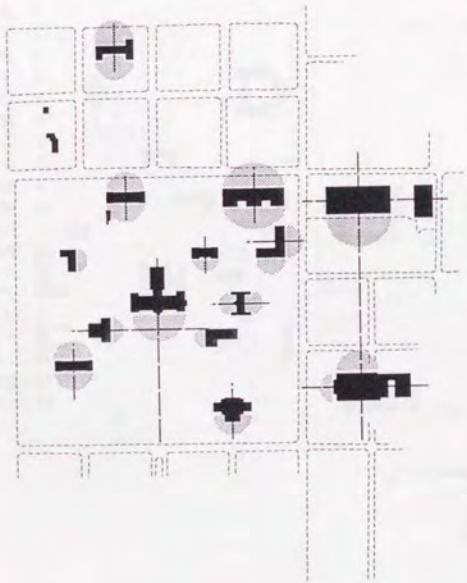
表のオープンスペース

裏のオープンスペース

軸

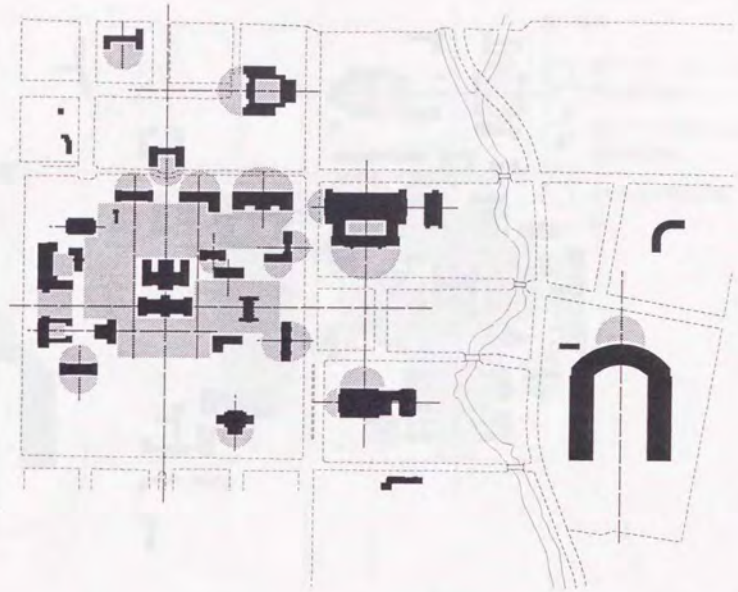
1900年

1/7,500



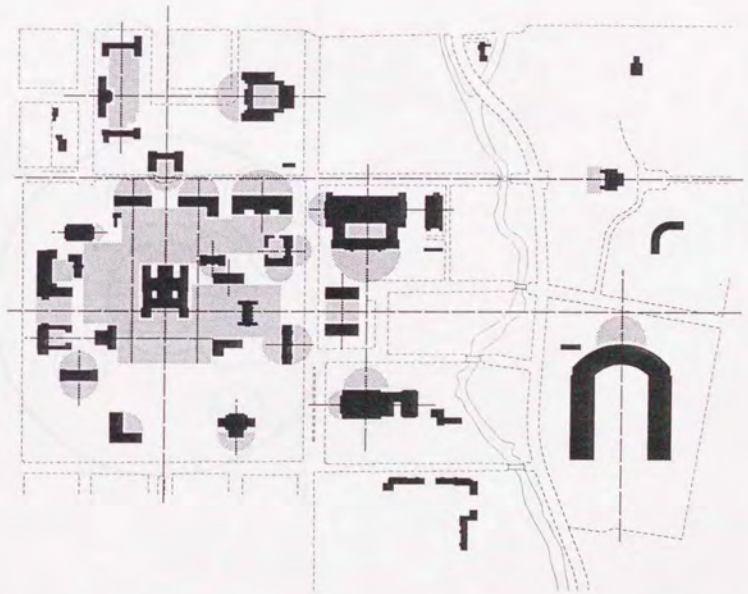
1930年

1/7,500



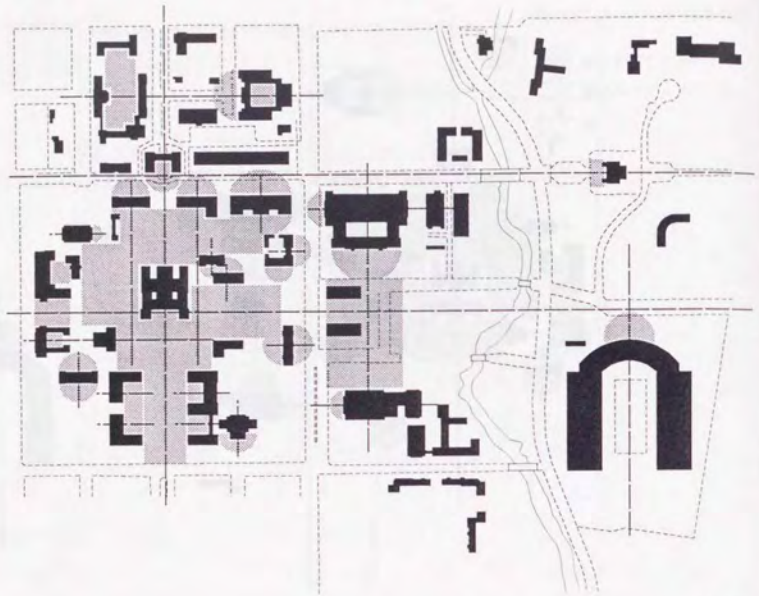
1933年

1/7,500

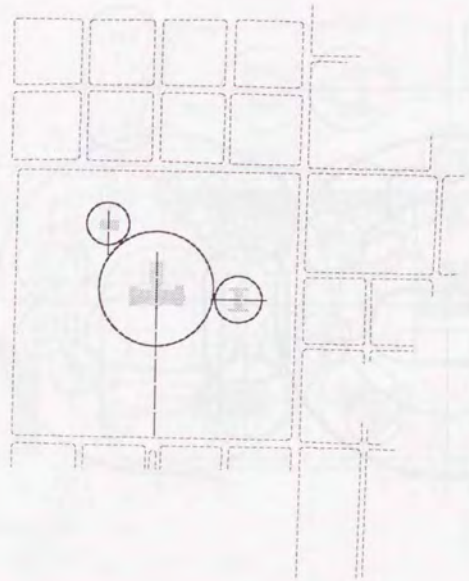


1942年

1/7,500



1955年　1/7,500



編成領域

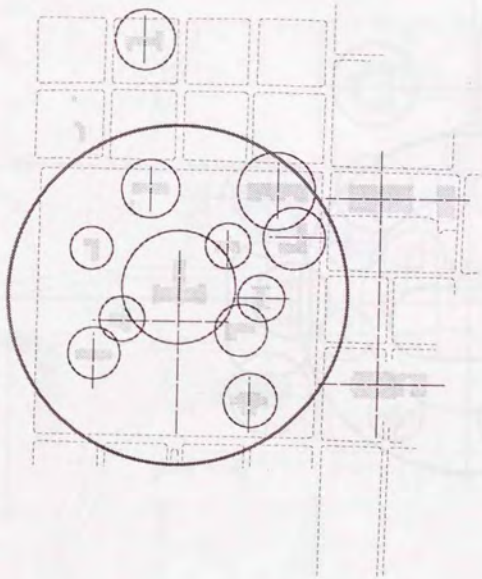
表のオープンスペースを囲む編成領域

裏のオープンスペースを囲む編成領域

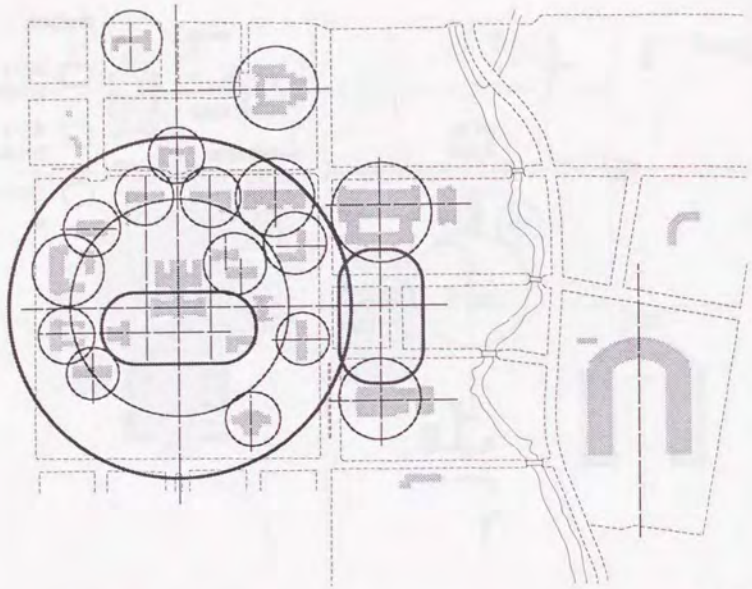
上記以外の編成領域

軸

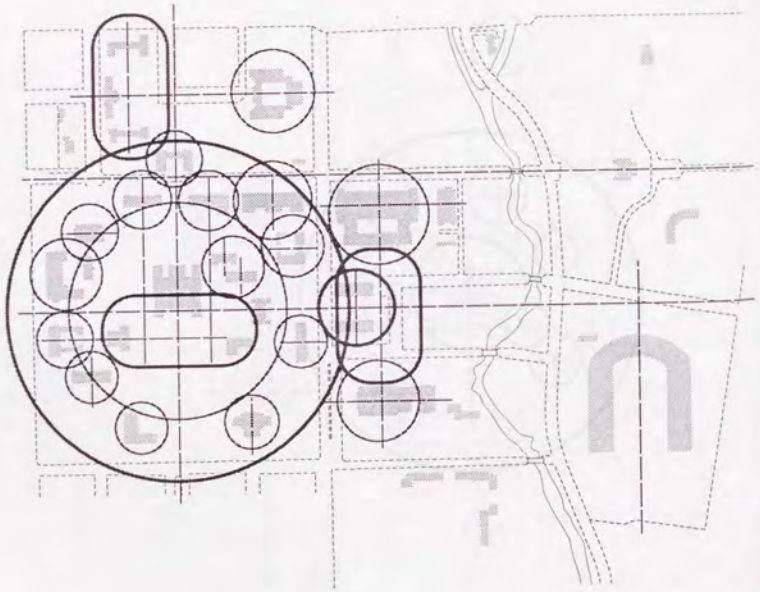
1900年　1/7,500



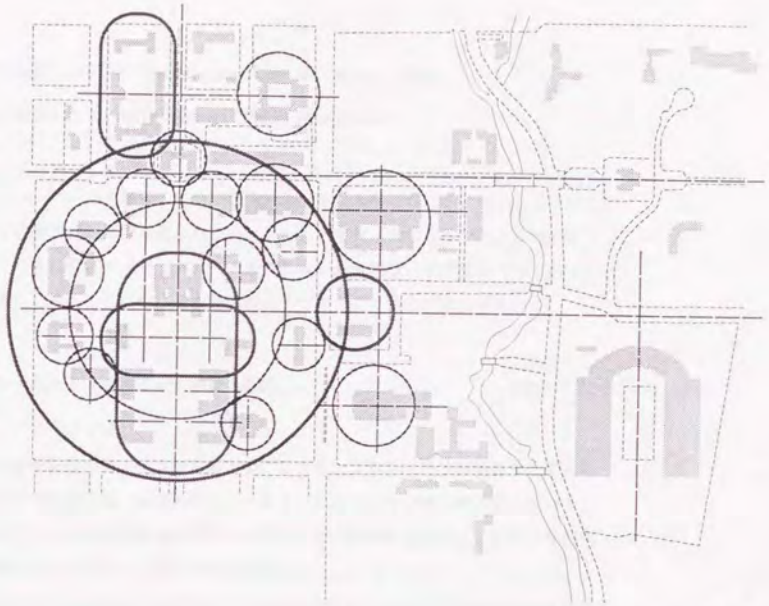
1930年　1/7,500



1933年　1/7,500



1942年　1/7,500



1955年　1/7,500

5－8　ハーバード大学ーノースヤード・ホルムズ地区

(Harvard University, Holmes District, Northyard)

ーハーバード大学は、この期の欧米の枢要な大学における変容としては珍しく宮殿形式の適用は見られない。しかしテキサス大学と並びアメリカのキャンパスに特有のオープンスペースの特性を最も明瞭に示す例の一つであり、それを理解するために適当な例の一つであることから取り上げる。

5－8－1　大学と分析対象の概要　　図HV-1~7

1636年創設のアメリカ最古の大学。もともとコロニーの牧師養成を目的とした寄宿制の学校。総合大学となった今日でもカレッジが主体となっている。19世紀から20世紀前半にかけ、自然科学系の学部や大学院、その他の専門学部を拡充、新設し、総合大学に変貌した。

対象とした地区は、大学発祥の地であるハーバードヤード北側に隣接する地区で、自然科学系学科や学部の拡充、新設などはここを中心に行われた。広さは現在およそ11ha。もともとは街路で分断されていたこともありさらに小さい。カレッジレベルの自然科学関係の諸学科の他、法学部や関連施設、大学院学生寮などが展開する。開発は19世紀末から始まり、1950年代までにほぼ完了する。その後はリノベーションやオープンスペースの隙間を埋めるような計画が続いている。

5－8－2　変化の概要　　図5-36、37

（1）1890年代

ノースヤードの中心は東西をオックスフォード通りとマサチューセッツ通りに、南北をカークランド通りとジャービス通りに囲まれた区域－ホルムズフィールドと呼ばれた区域である。この区域（以下他と区別するためホルムズ地区とする）はスポーツグラウンドが中央部に広がる一方、外縁部の街路に面したところに施設が展開する。カークランド通りに面してはハーバードヤードの方向に正面を向け一群の建物が配置される他（ローレンス(1847)、ヘムンウェイ・ジム(1878)、オースチン(1884)、ジェファーソン(1884)）、マ

サチューセッツ通りと、ジャーヴィス通りに面し各々一つづつ建物が置かれる（ハスティングス(1888)、キャレイ・ジム(1884)）。いずれも建築形態の共通性は少なく、一定の相互距離をおいた配置がなされ、各々独立した領域を形成している。街路側に正面を向け、背後が空地で、裏表の二面性が感じられるものの、前庭的なまとまりはほとんど見られない。田園的なオープンスペースが連続し、その上に各建物の形成する領域が孤立して散在する。

ノースヤードで最も最初に開発されたのはディヴィニティ通りの区域であった。ここには神学校(1825)に対面し、長大な翼部を持つ博物館(1859~89)が置かれ、比較的閉じられたオープンスペースが形成されている。オックスフォード通りの先にも街路を挟むように二つのホール（バーキンス(1893)、コナン(1893)）が建てられるが、街路からの距離もあり独立的に見えるのは、ホルムズフィールドの建築群の場合と共通する。

（2）1910年代

この段階になると建築群が囲むオープンスペースを中心とした緩やかなまとまりが生まれる。が、同時に、各建物が形成する独立的な領域の特徴も維持され、地区全体に連続的に広がる田園的、一体的なオープンスペースの感覚も侵されない。

ホルムズ地区では、オックスフォード通りに面し建てられたパースホール(1900)と地区の中央部に置かれたラングデルホール(1906~26)が中心部に広がる空地を閉じ、同時に大きく二つに分割し始める。結果として各建物がこれまで裏的な領域としてきた地区中央部に、建物によって緩やかに囲まれたオープンスペースのまとまりが生まれる。開発初期の建物、たとえばオースチンホールなどと比べると一つの建物の裏表の差はより小さくなり、建物の両面でオープンスペースを等しく区切る。メインアクセスのつく正面はあるが、付属屋が自由に展開するような裏的領域は見られない。

この場合も、既存の建物との関係で、建物周囲に形成する領域が相互に強く干渉しないような配置がなされ、各建物の独立性が保たれる。結果として、地区全体に備わる田園的なオープンスペースの一体的なまとまりは維持され、同時に建物が緩やかに囲むオープンスペースのまとまりも感じられる。

（3）1930年代

ホルムズ地区では南東角が買収され、直接カークランド通りに面しリトウアーセンター(1937)が建ち、背後でオースチンホールやジェファーソンラボ、ペインホール(1913)、あるいは回転引家されたガネットホール(1910~20

引家)などとともに緩やかにオープンスペースを囲む。このほか同様にオープンスペースが建物に挟まれるなどして、スケールの大小はあるが、同様なオープンスペースのまとまりが随所に形成される。そしていずれの場合も、これまでの変容と同じく、相互の領域を大きく侵さぬように距離、配置が考えられ、この地区の田園的なオープンスペースの一体感を損なわぬように配慮される。

クラフトラボ(1930)、リイマンラボ(1930)がジェファーソン、パースの両ホールの間に増築される。規模は比較的小さいが、これまでと同様、田園の中に独立的に建つような形態を与えられ、またオープンスペースを完全に閉じないよう最小限の間隔をあけている。

（4）1950年代

地区の北側でジャービス通りの反対側まで敷地が一体化され、独立的なヴォリュームによってオープンスペースを緩やかに囲んでゆく方法でグラデュエートセンター(1952)が作られる。パースホールに増築(1946)がされ、ゴードンマッケイホール(1953)、ミュージックビル(1955)、ラングデル（1957）の増築などが続く。この段階になると一段と多様な平面形とスタイルで新増築がなされるが、これまでと同様、距離、配置は既存の独立的なオープンスペースの領域を極力壊さないように調整される。従って地区全体の共通の特徴である田園的特性も同様に維持される。

また、ラングデルとパース、ジェファーソン、ロッチラボ（旧キャレイ・ジム）などに囲まれた中心部のオープンスペースがとりわけ大きく残される。この地区全体として、大きくそれを中心として周囲に比較的小規模なオープンスペースが分散する編成形式が生まれている。

5－8－3　変容の特徴と空間編成の形式

一変容の特徴　　図5-38~41

変容の全期間を通し、地区全体として田園的、一体的なオープンスペースが続く。これは草地状のグランドカバー、植栽が地区全域に広がること、独立的な建物がその連続性を破らないことなどによって可能となった。

建物がオープンスペースの四辺を囲む場合、原則として四つの入り隅は塞がれないように建物は分離して配置される。結果として、緩く囲まれたオープ

ンスペースのまとまりが連続してつながっていゆく。[50]

実際の変容の過程では最初、街路に沿って建物が展開し、大きく中央に空地を取り囲む。そこに建物を挿入してゆくことで、オープンスペースが分節されてゆく。

施設の増大によって建物の配置される領域が拡大してゆくとき、それまで地区周辺にあった囲われたオープンスペースが内側でも反復され、かつオープンスペースの規模も増大する。全体として比較的小さい囲まれたオープンスペースが、地区の中心部にあるより大きな囲まれたオープンスペースを周囲から囲むという形式をとる。囲むことが中心を示すという点で、これは中心の入れ子状の構成と言える。地区全体はこの全体スケールで反復された中心性、囲みの形式により、統合性、一体性を獲得している。

一空間の編成形式　　図5-35

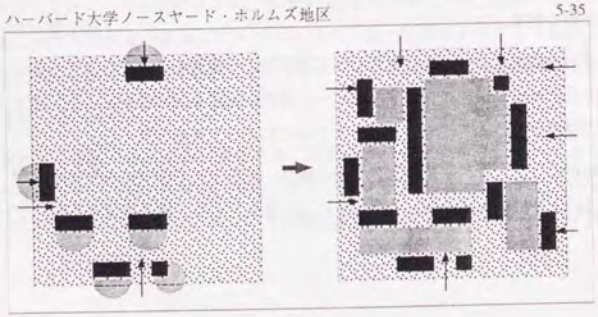
一体的な田園的オープンスペースを建物によって緩く囲む、あるいは区切る。独立的な各要素の領域。中心性の入れ子状の構成。軸性はほとんどなし。

5－8－4　宮殿形式の検証

要素レベルでは、その多くにおいて街路に面し一貫した対称的建築形態を持つ宮殿様の建築が用いられるが、二領域性も都市空間を引き込む囲われた前庭も見られず、軸による統合性もない。宮殿形式の適用はない。

全体に軸による統合は見られず、緩く囲まれた田園的オープンスペースが連続してゆく。全体レベルでもほとんど二領域性は見られない。地区全域が田園的特性に収斂してゆくと言える[51]。宮殿形式の適用はない。

ハーバード大学ノースヤード・ホルムズ地区　　5-35



ハーバード大学　配置図-1　　5-36

1890年代　　1/7,500

1910年代　　1/7,500

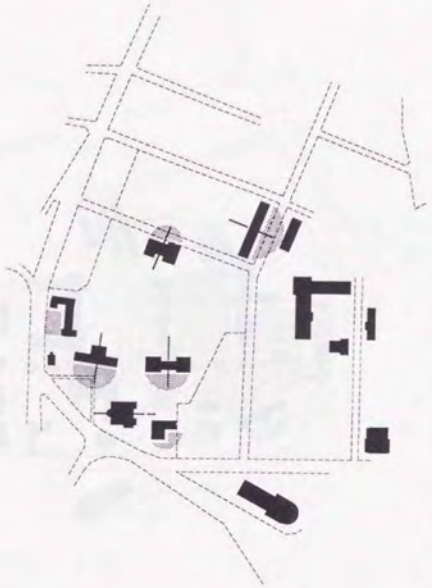
1930年代　1/7,500

1 行政学院
2 オースチンホール
3 ジェファーソンラボ
4 ラングデルホール
5 パースホール
6 ロッチラボ
7 ヘムンウェイジム
8 メモリアルホール
9 ローレンスラボ
10 ミュージックビル
11 ゴードンマッケイラボ
12 グラデュエートセンター
13 パーキンスホール
14 コナンホール

1950年代　1/7,500

オープンスペースの基本単位

表のオープンスペース
裏のオープンスペース
軸



1890年代　1/7,500

1910年代　1/7,500

1930年代　　1/7,500

1950年代　　1/7,500

編成領域

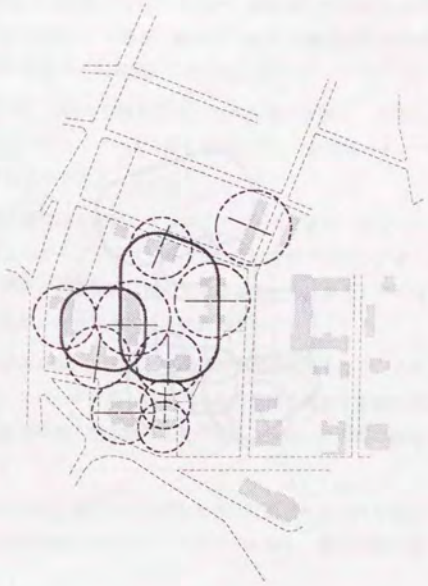
表のオープンスペースを囲む編成領域

裏のオープンスペースを囲む編成領域

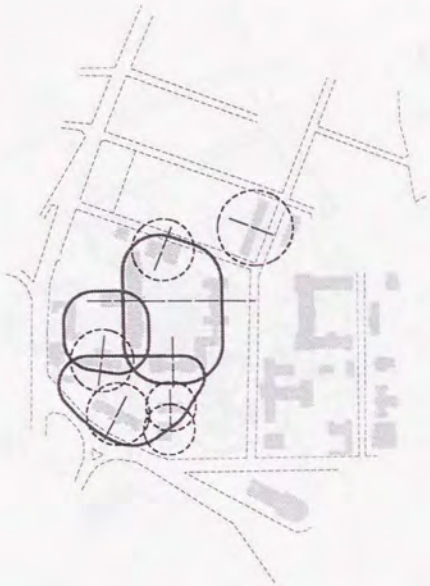
上記以外の編成領域

軸

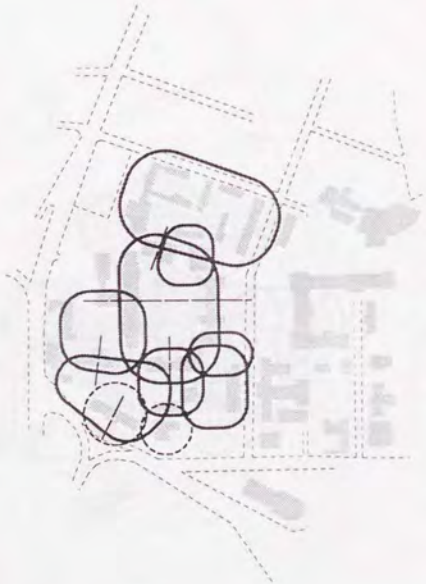
1890年代　　1/7,500



1910年代　　1/7,500



1930年代　　1/7,500



1950年代　　1/7,500

5－9　対照例の分析のまとめ

欧米の対照例においても、空間編成の変容の過程がさまざまな形で宮殿形式に規定されていたことが明らかとなった。ここでは、前節までに示した宮殿形式の三つの適用形態を改めて整理し、さらに各々の適用形と大学の組織、スケールとの関連を概観する。前章の本郷キャンパスの分析で見た同様の適用形態の類型との比較検討は次章でまとめる。

5－9－1　宮殿形式の適用形態における三類型

前節で見た７校の宮殿形式の適用形態を整理すると、以下のような三つの型となる。すなわちA）原型的、B）反復的、C）体系的の三つである。

A)　宮殿形式の原型的な適用形態　　図5-42

原型的な適用形態とは宮殿形式の原型が持つ基本的な特徴が保たれるような変容の場合を指す。編成形式としての宮殿形式の持つ一体性、統合性など、基本的特徴が維持される範囲で変化するため、結果として形成される領域も、宮殿形式のそれに等しい一体性、統合性を備えた編成領域が形成される。ベルリン大学の変容はその典型的な例であった。

この形態の変容では、大学の空間は表裏二つの領域で成長し、変容してゆく。表－都市側のオープンスペースを囲む領域と背後－庭園側のオープンスペースを囲む領域の二つである。

庭園での大学施設の展開は、表側のオープンスペースと直接つながらないため、大学内部に閉じたオープンスペースのまとまりを作りやすい。が、この原型的適用では、開かれ、連続的に拡張する庭園ないしは裏としての特性を維持し、かつ構内全域の統合性が保てる範囲で変容する。

成長は都市側でも見られる。もともと宮殿形式は都市空間を作り、それと一体になったオープンスペースを囲むことで大学の空間を統合する編成形式であった。庭園側の成長に加え都市側の成長が進むことは、この型の特徴からすると自然であった。

ベルリン大の場合は広場を囲むことになったのは計画されたものではなかったが、次に見るＢの参考例で挙げたストラスブール大も、適用形態の違いを

こえ街の広場と直線路で結ばれ、対になって都市空間の骨格を形成していることに変わりはない。

裏表のオープンスペースの連続性、統合性は宮殿形式の母屋を分割し、その間に軸を通して裏と表を結ぶことでも可能となる。宮殿形式の断片化、「大形式」化であり、本郷キャンパスの草創期から明治期の初頭にみた適用形態でもある。こうした「大形式」も宮殿形式の基本的な特徴をそのまま引き継ぐものであるので、それに規定された変容は宮殿形式の原型ないしは原型の変形形態の適用とみなせる。

大学の成長がさらに進み、次に見るような反復的な適用に変わると、本来一体的な宮殿形式も表と裏の二つの領域が各々独立的な編成領域に分離してしまう。もはや全体を貫く主軸によっても統合されない明確な領域としてのまとまりを形成する。結果として原型的な宮殿形式に見られた構内のオープンスペースのまとまりが、同時に外に開かれたオープンスペースでもある宮殿形式の基本的特徴が損なわれる。

Bの参考例で挙げたストラスブール大、ベルリン工科大学などでも、相対的に大きな母屋があり、それを貫通する主軸が構内の主要部分を統合し、背後に展開する建物も相対的に小さく付属屋として扱われているなど、はじめは原型的な適用形態をよく示した。しかし最終的には、宮殿形式が反復して適用される別の変容のパターンを示し、結果として形成された領域は、表と裏の相異なる特性のオープンスペースを囲む別々の編成領域の集合体となる。

原型的な適用形態の変容には、相互関連の薄い諸学部の教育・研究を学問として統一し、大学の活動の一体性を求める近代大学初期の特有の理念があったと思われる。外部との連続性は希薄になったが、大学内部で一つの庭園的オープンスペースを大きく囲む形式は、大学の共同性、一体性を空間に置き換えたものとして自然な解決ではあった。

大学としての組織から見ても、宮殿形式の原型的な適用の場合、その多くが本部を始め、大学のほとんどの分野を含む完結した区域となっていた。

ースケールの比較

宮殿とはいえ、基本的に一つの屋敷として、分析対象として取り上げた大学

空間の中ではスケールは最も小さいものの一つである。Bの参考例にはとりわけ大きなものもあるが、上述したように、最終的には次に見るBの反復的な適用形態に近い変容を遂げる。敷地の広さは推計、ベルリン大で2.4haである。

B) 宮殿形式の反復的な適用形態　　図5-43

この適用形態では、宮殿形式はより大きな全体をつくる要素に適用され、大学の成長と共に機械的に反復される。要素となった宮殿形式は、街路あるいは街路に見立てた構内道路に面して置かれるという条件のみに規定されて数を増やし、全体はその結果として与えられる。宮殿形式は表側には建物に囲まれた都市的オープンスペースがあり、それが裏的、あるいは庭園的なオープンスペースと統合され、一体的な全体を形成する編成形式であった。反復的な適用形態は、そうした原型的な適用形態では規定し得ないようなより大きな空間や、変化が専門に分かれ個別的になってゆくときなどの変容に対応できたが、集合形としては相対立する二領域の統合的一体的な編成形式を作るには至っていない。次に見る体系的な適用形態と比較するなら、過渡的なものと言える。

例としては、ボローニャ大、ケンブリッジ大を挙げることができる。参考例として挙げたベルリン工科大とストラスブール大は、原型的な宮殿形式を母屋に持った場合の反復的適用の結果をよく示している。前2例と異なり組織も大学本部を含み完結しており、規模もはるかに大きい。パリ大は特殊な条件下にある原型的適用でもあり、またこの適用形態の一つとも見なせる。

変容の結果、表にはファサードが並び、背後に庭園や空地、裏的領域を抱えた一つないしは複数の街区が形成される。要素に対し相対的に広い敷地が与えられる場合、構内に街路あるいは広場などが導入され、それに沿って同様な成長が続き、結果として街区が形成される。

構内に生じた街区は構内を分断する可能性がある。ボローニャでは半ば実際の公道が導入されており、全体を覆う緑、類似した建築型が見られなければ、一体の敷地がなすオープンスペースとしてのまとまりは分解していたと思われる。

大学全体の範囲が広がる都市レベルで比較すると、地区全体として街区を形成し、街路によって他の地区との一体化がはかられたこともある。しかし、既存市街である限り限界があった。

この型の適用形態が見られる地区は、専門学部の一部（ボローニャ、ケンブリッジ）か、あるいは大学本部や教養部が位置していたとしても、空間の量的な面では主に専門学部が展開した（パリ、ストラスブール、ベルリン工科）区域である。相互関係の薄い専門分野の教育研究施設が集結し、相互の独立性が空間的にも求められていたと言える。

ースケールの比較

第二の適用形態は、参考例も含めると、適用形態の三つの類型の中のほぼ中間であることがわかる。ボローニャ大とケンブリッジ大の例では既成市街地の街区を前提としていることから、規模が限られていた。

参考として敷地面積の推計を掲げる。

ボローニャ大・P.ヴィオラ地区；5.3ha、ケンブリッジ大；3.4ha、ボローニャ大・獣医学部地区；2.0ha程度、パリ大；2.1ha、ベルリン工科大；7.6ha（1906）、ストラスブール大；10.6ha（主要部）程度

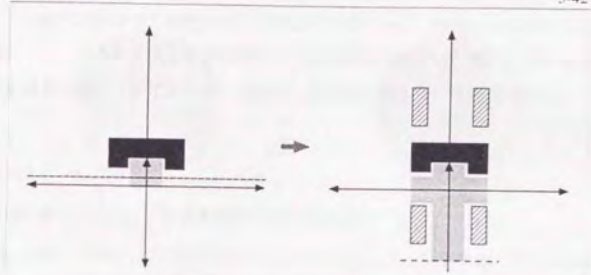
C）宮殿形式の体系的な適用形態　図5-44

この適用形態は、宮殿形式の変形形態の一つである「T字形式」を編成の単位とし、その軸を合わせながら複数組み合わせることにより形成される編成領域の変容を規定した。結果として要素レベルの領域から全体レベルの領域に至るまで、各レベルで宮殿形式に備わる特徴を備え、かつ構内全域を覆う大規模な編成領域が形成される。

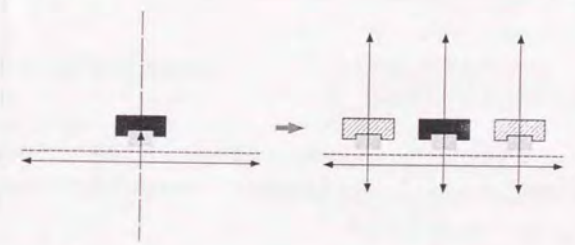
宮殿形式は都市と庭園を統合すると同時に区切るものであった。大学の成長はより広い庭園側で進み、外部世界との関わりは弱いものであった。Bの型では部分的に都市空間を囲み成長したが、全体としての統合性、一体性は弱かった。この体系的な適用形態は、大学の成長の結果内部で生じる多くの空間的なまとまりを統合しつつ一体的な領域を形成し、かつそれを大学の外部世界と連続させる。編成形式としてはT字形式という一定の単位を持つため、成長に合わせ基本的特徴を維持しつつ規模を拡大してゆける。結果として形成される空間は、部分においても全体においても宮殿形式の統合的な特性が生かされている。例としてはローマ大、テキサス大が挙げられる。

実際にはこうした類型が純粋に現れるより、基本的にA（原型的適用）から始まり、後にB（反復的適用）の変容を示すというように複合化されること

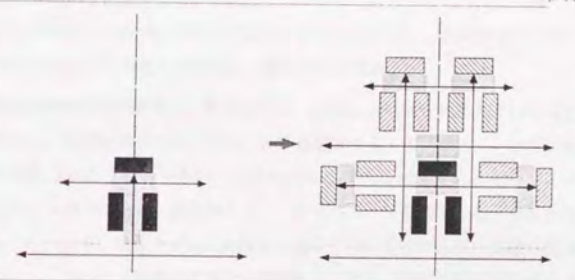
A　原型的適用　5-42



B　反復的適用　5-43



C　体系的適用　5-44



もある。

この適用形では実例の年代が下ることから、全般に大学の組織、規模が拡大し、全体のおおよその構想があって計画を進めている。組織面から言うと、ローマ大、テキサス大とも教養部門、各種専門学部（その一部）、大学の管理部門が位置し、大学として一応完結した組織をなしている区域である。

ースケールの比較

規模は最も大きい。下に敷地面積の推計値を掲げておく。

ローマ大；21ha、テキサス大・オースチン校；16ha（1900頃）から144ha（1990頃）

ちなみにハーバードのホルムズ地区の敷地面積は推計11ha（1940以降）である。

5－9－2　スケールの比較

上記の三つの適用形態とそれが規定した敷地のスケールおよび主要なオープンスペースの基本単位のスケールの関係を見る。　図5-45

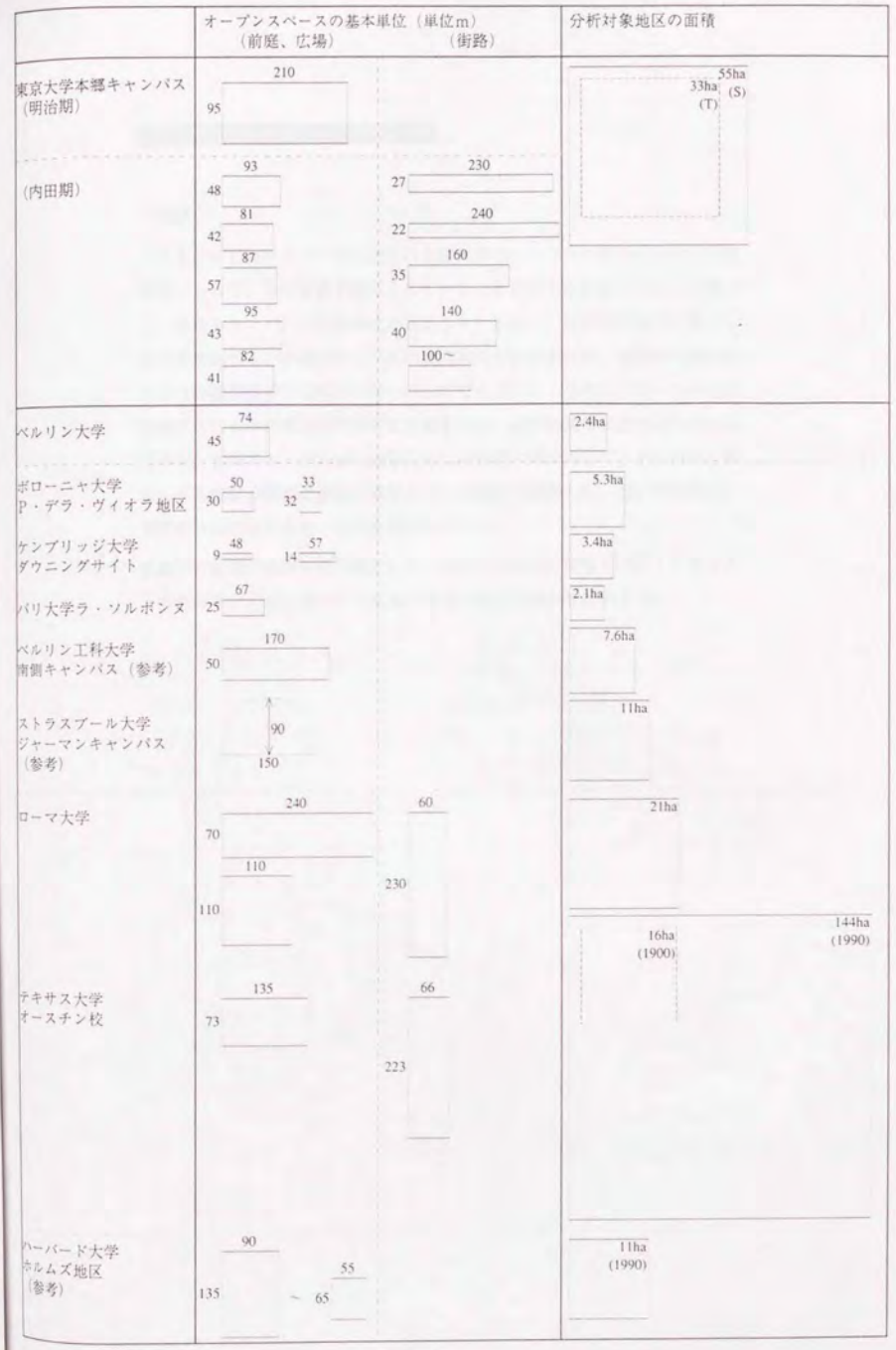
Aの原型的な適用形態では、敷地面積が2.4haと最も小さいものの一つである。オープンスペースのスケールはCよりも小さいが、Bの諸例と比較するなら、中間的な位置である。しかし、大学本部を含めたもののみで比較（ストラスブール、ベルリン工科）すると、Bよりも小さい。前庭的なオープンスペースの大きさはおよそ幅70m、奥行き45mである。

Bの反復的な適用形態では、敷地面積は、概ね2ha～3haから最大で10ha以上までである。既存の都市街区のスケールを基礎とするものは小さく、旧市街周辺で開発されたものは大きい。前者の例では構内に形成されるオープンスペースも小規模である。前庭的なオープンスペースで見ると、幅が30mから50mぐらいまで、奥行きが10m前後から30mぐらいまでである。組織の面から見ても、特定の分野の研究施設が展開する。取り上げた地区だけで完結した大学の組織には対応していない。後者、即ち、大学本部を含んだ地区の例では、オープンスペースのスケールは最大で170m×50mに達する。間口が奥行きに比例し大きいことも特徴である。

Cの体系的な適用形態では、20ha程度以上が基本であるが、上は100haを越え適用されている。組織としては、大学本部を含めた完結したまとまりに対応している。構内のオープンスペースは、全体規模とは無関係に適当なスケールの範囲に収まっている。最大で幅が70m前後、長さ（奥行き）が220、230m前後である。 Aとは逆に、幅に比し奥行きが深く、内部で間口の広い広場があることが特徴である。その他の広場は各辺30m以下のまとまりから一辺100m以上のものまで多様である。

以上より、概ねAとCは敷地とオープンスペースのスケールに対応していることが理解できる。構内のオープンスペースのまとまりも全体規模に相関し大きくなる傾向があるが、長さや巾にはCで見た程度（長さ230m前後、幅70m前後）の限度があると思われる。

Bについては、大学組織も立地の条件も大きく異なるので一概に比較はできないが、専門を異にする対等な組織の単位が集合したときは、構内のオープンスペースのまとまりはA,B,C３者の中では最も小さい。又、他と同様、そのスケールと全体規模は関連している。参考例のような本部を含む完結的な組織に対応した例では、敷地、オープンスペース共にスケールはA,B,C３者の中の中位をしめている。これらの例では、その形成の初期には宮殿形式を拡大することのみで大学の成長に対応しようとしたが、専門分化の進展に伴い、次第にBの適用形態に移行し、同時にオープンスペースも小さいものへと分解されていったと推断される。



6章　東京大学本郷キャンパスの特質

一概要

これまでに本郷キャンパスと欧米の主要大学のいくつかの例で、ともに宮殿形式によって、その変容が規定されていることが明らかになった。この章では、本郷キャンパスの宮殿形式が適用された形態と、対照例の変容で見たそれとを比較する。本郷キャンパスの全期間にわたる変容が、対照例で見られた三つの適用形態と基本的に同一のものであること、さらにこの三つの適用形態が近代大学の成立と平行する宮殿形式の一連の展開の過程と見なせることから、本郷キャンパスが、変容の激しい近代大学にあって、そのほぼ1世紀に亙る空間の形成と変容の過程を同一の場所で展開した、他に例を見ない大学の空間であること、などを明らかにする。

最後に、宮殿形式が分析対象とした近代大学の空間的変容を規定してきたことの意味を、近代大学という共通の背景に照らし合わせ検討する。

6－1　東大本郷キャンパスと対照例における適用形態の比較

東大・本郷キャンパスの骨格が形成された過程は、極初期の展開から宮殿形式に規定されていた。自然に成長したように見える震災前の変容も、計画に則り展開した震災後も、その過程は、大学の空間類型の一つである宮殿形式とその変形の過程として考えられた。

極初期の草創期には「大形式」の萌芽が見られた。大学はまだ一つの組織というより、いくつかの専門学校の連合体に近いものであった。明治期には、宮殿形式の原型を拡大、断片化する「大形式」が明確に現れ、最終的には、「大形式」の分解と再統合、構内街区の形成にまで至る。大学が分科大学制のもと学問研究のための体制を整え、一応、近代大学の体をなしていった時期に当たる。そして内田期には、街区型建築を要素に、「T字形式」を編成単位として、要素から全体に至るまでレベルに応じ変形されながら、変容を規定した宮殿形式の体系化が行われる。まさに総合大学に対応する、統一的なキャンパスが求められた。

この本郷キャンパスの変容とほぼ同時期、同内容の欧米の主要大学の変容においても、宮殿形式の適用が広く見られた。そこでは、三つの適用形態が存在した。A）原型的な適用、B）反復的な適用、C）体系的な適用、の三つである。また、宮殿形式自体の変形形態も存在した。宮殿形式の母屋が分解、断片化される「大形式」及び「T字形式」である。

6－1－1　宮殿形式の適用形態の比較

この宮殿形式の三つの適用形態と東大本郷キャンパスの変容の各時期に見た宮殿形式の適用形態を比較を行う。

1）草創期は宮殿形式の原型を拡大し断片化する過程が進み、日本的な変形をうけつつ「大形式」の原型的な適用が見られた。

2）明治期は前半と後半の変容が分かれる。

前半には宮殿形式の「大形式」化が明確になり、さらに宮殿形式の背後での主軸に沿った展開が見られ、上で述べたAパターンの原型的な変容を示す。具体的には、東大で見られた宮殿形式の母屋が拡大され、断片化される「大形式」化は宮殿形式における一つの母屋がスケールのみ大規模化されたもの

と考えられるので、それを貫通する主軸にそって母屋の背後に両側から建物に挟まれたオープンスペースが伸びてゆく点で、東大はベルリン大に見た原型的な変容を示している。

後半には、Bパターンの街路に沿った反復的形態の典型的パターンが見られ、街区が形成される。それと並んで「大形式」は分解され、街路と前庭を要素とする再統合の形式が生まれるが、これらは、Cの体系的な適用形態への過渡的な形態と言える。

ボローニャ大では要素を宮殿形式に限定し、街路に沿って展開する点は共通であるが、構内外で明確な街区を形成するところまでも達しなかった。

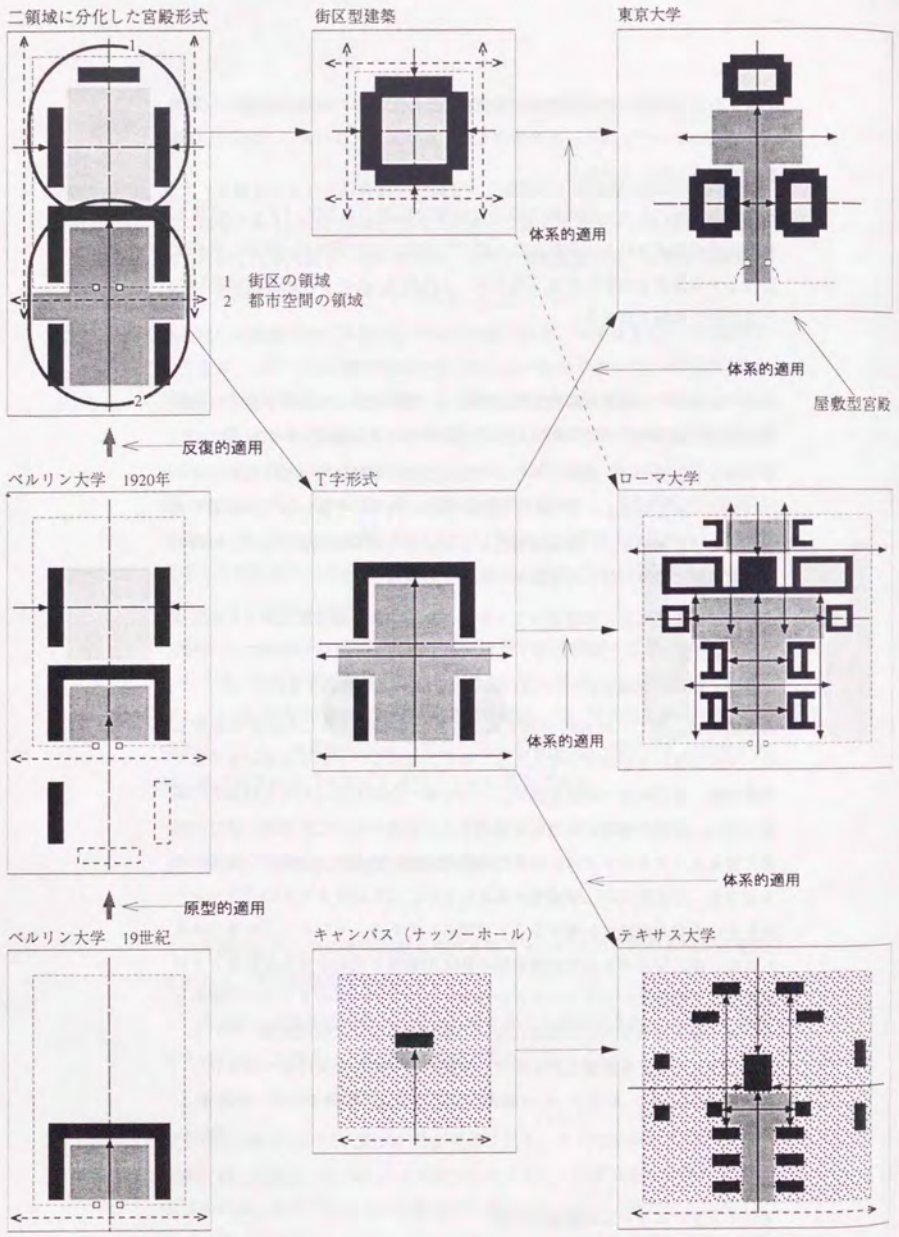
ケンブリッジ大では、最初、クワッド形式により明確に境界づけられたオープンスペースを形成し、それから街路が構内に向かって伸びる点は共通である。スケールが小さく、最後は構内にも街区様の領域を形成するが、街路の両側を明確に境界づけられず表裏の混在する混乱示す。

3）内田期；四側面に宮殿的なファサードをもつ街区型建築に達した過程はBの変容の型である。同時に「T字形式」を編成単位として明確にし、それに基づく体系的な編成法が作られる。これはCの型に相当する。

具体的には、同じく計画的な例であっても、本郷の一貫した変容と比較しローマ大は裏的な領域がいぜんとして残り、要素レベルから全体に至るまでの序列的、体系的な一体性は弱い。一つの単一な巨大化された宮殿形式の編成に近い。変容の過程が反復的な適用を受けず進められた計画的な建設の結果と言える。テキサス大は、体系性は共通だが、独立的、完結的な建築が繰り返され、宮殿形式の二領域性がみられない。これはアメリカの「キャンパス」という編成形式に由来することは明らかである。ちなみにCの適用は見られないが、ソルボンヌでは内田期の街区型建築と同様な光庭型建築とそれが集合して作るクールドヌールというオープンスペースのまとまりが認められ、表・裏を要素レベルの編成において統合する点で比較的共通している。図はこうした関係を整理したもので、宮殿形式が変形を受けつつ適用され、各々のオープンスペースの編成を導いたことが示されている。

図6-1

6－1－2　スケールの閾値の比較


二領域に分化した宮殿形式
街区型建築
東京大学
1
2
1 街区の領域
2 都市空間の領域
体系的適用
体系的適用
屋敷型宮殿
反復的適用
ベルリン大学 1920年
T字形式
ローマ大学
体系的適用
体系的適用
原型的適用
ベルリン大学 19世紀
キャンパス（ナッソーホール）
テキサス大学

次に適用形態とスケールの関係を検討する。図は敷地面積とオープンスペースのスケールをまとめたものである。これから判断し、限られた対照例で見る限り、A、B、Cの三つの適用の型は、敷地面積およびオープンスペースのまとまりの大きさに関連がある。つまり宮殿形式の適用形態には、スケールに関し一定の閾値があると思われる。　図5-45

本郷キャンパスでは、草創期から明治期前半にかけて形成された大前庭は210m×95m程度であった。これは宮殿形式の前庭に相当するもので、Aの適用形態で見た前庭の寸法より大きいが、敷地面積も15倍に近い33haに達する。比較としては東大と同様原型が拡大されたベルリン工大とストラスブール大と行う方が適切である。3者の比較では前庭のスケールは巾、奥行きとも類似していることがわかる。

明治期に発達する構内の大街区の面積は概ね1.6ha（135m×140m、理地区の最大寸法）、3.5ha（200m×190m、工、理地区の最大寸法）、3.4ha（300m×340m、法文、医、育徳園庭園地区の最大寸法の内、医と図書館建物を最低限囲む範囲）程度であった。Bの適用形態のうち、大学本部を含まない例の地区面積2ha～3haにほぼ相当する。

さらに内田期では、中間レベルのオープンスペースのうち街路のまとまりは、正門地区で27m×230m、22m×240m、赤門地区で35m×160m、農学部地区で40m×140m程度であった。前庭的広場で見ると講堂前の48m×93mから図書館前の42m×81m程度、工1前の87m×57(71)m程度、さらに農3前の43m×95m、医本前の41（58）m×82m程度に収まっている。街路の幅は20m前半と30m前後、40m程度が多く、長さは門を貫通する主要軸で100m前後（弥生門－理1）、150m前後（赤門、農正門）、230m前後（正門）と一定の比率で増える傾向がある。いずれにせよ、Cの適用形態で見た幅70m前後、長さ220、230mを最大とするオープンスペースのスケールに合致し、その他の前庭的な広場の寸法もCで挙げられた多様な広場の寸法の枠の中に収まっている。

以上、オープンスペースのまとまりのスケールから見ても、東大の変容は、各時期において各々欧米の対照例に見た三つの適用形態のオープンスペースとほぼ共通していることが明らかになった。

6－1－3　東大本郷キャンパスの変容に見る固有性

本郷キャンパスの全期間にわたる変容は、基本的に、欧米の主要大学で見られた宮殿形式の三つの適用形態と同一の適用を示していることが明らかになった。即ち、原型的な宮殿形式の適用による領域の形成から、構内の分断化の危機があった反復的な適用形態を経て、最終的に体系的な適用による都市的スケールの環境の形成に至るまで、欧米の大学がこの時期に示した宮殿形式の適用形態のそれぞれを順次経験してゆくのである。

ここでは、宮殿形式の三つの適用形態とそれがもたらしたオープンスペースの編成、東大および対象地区の大学の組織上から見た特徴との関係を見る。

Aの原型的適用が見られたベルリン大や東大草創期、明治期前半では、原型となった宮殿形式を採用する事自体が大学の一体性を求めた近代大学の最初期の理念、あるいは大学草創期の一体性の模索の時期に対応していた。この適用形態では、宮殿形式は表の都市側と裏の庭園側の二つの領域で変容を遂げた。すなわち、前庭側では、都市空間のオープンスペースを囲み、大学のいわば表のオープンスペースを形成する。一方、庭園側では母屋の付属棟などが展開した。いずれも原型の持つ前庭という表のオープンスペースを中心とする一体性が失われない範囲の変容であった。

Bの反復的な適用は、相互に独立した領域に専門分化しつつあった組織上の状態に対応していた。対照例の中で参考例として挙げた大学でも、組織上は各専門領域の独立的な施設が展開した時期であった。大学は大規模化、複合化してゆき、空間編成としては宮殿形式を単純に増やしていった。その結果、建物背後で裏が合わせられまとまり、大学内部の共同の場としての前庭は実質的な意味を失う。背後の庭園側で都市空間と切れた形で大学内部の独自のまとまりが形成され、表裏の領域が分化していった。

Cの体系的な適用は、東大の内田期が典型であった。分化した組織からなる大学がさらに大規模化されようとした時、組織を再統合し、大学の総合性、一体性を回復しようとする動きにそれは対応していた。この適用形態では、先に導入され始めていた都市的オープンスペースがさらに展開し、それが作るオープンスペースの体系を中心として全域が統合される。裏のオープンスペースは建築内や特定のオープンスペースに限定され、大規模化、複合化された大学組織に対応し翻案された新しい宮殿形式が形成された。庭園的オープンスペースは再び本来の庭園として位置づけられる。

以上より、近代大学の大学としての変容とオープンスペースの編成の変容は密接に関係していること、オープンスペースの編成と大学組織の変容が個別

的な現象ではなく一連の過程であることが明らかである。ここで上記の三つの対応関係を、オープンスペースの編成と組織に分けまとめると以下のようになる。

第一に、オープンスペースの編成という面からすると、宮殿形式の適用形形態の変化は、宮殿形式の原型に見られた表のオープンスペースを中心とする統合的な領域が、表裏の二つの領域に分離していったオープンスペースのまとまりを、再び表の都市的なオープンスペースを中心とする一体性を回復してゆく一連の過程であったと言える。大学の空間の中に都市的オープンスペースを体系的に導入するこうした過程は、同時に大学の中の共同性を空間化するオープンスペースを大学内部に向かって展開してゆく過程であった。

宮殿形式はもともと都市に開かれた大学内部のオープンスペースを中心とする一体的、統合的な編成が最大の特徴であった。従って、上で見たオープンスペースの変容の過程は大学内部のまとまりが同時に都市へ開かれたオープンスペースでもあり続けるという宮殿形式の基本的特徴が一貫して維持され、また一定のスケールの限度を持ったオープンスペースの編成形式を基礎としながら、分化した領域が再統合される過程でもあった。本郷キャンパスに見る変容は、都市に連続し同時に大学内部のまとまりをも保証する空間であった表のオープンスペースが体系を形成しつつ、裏的、庭園的な背後の空地を「地」とする大学の内部の空間へと拡大成長を続けてゆくプロセスであったと言えよう。

第二に、大学の組織としては、近代大学の理念に基づく一体的、統合的組織が専門分化により分断化され、それに対し再び大学としての総合性、一体性を回復しようとする過程であった。大学の組織上の変化は、近代大学の変容の過程に概ね従っている。近代大学は19世紀初頭、人間の全的陶冶をめざし、諸学の統一、教育と研究の一体性、職業主義の否定などをその基本的理念に据え、生み出された。しかし19世紀も半ば以降、次第に諸領域の専門分化と職業主義が進行する実態は覆いがたいものとなる。そして、更なる大学の大規模化の状況の中、20世紀をこえた最終段階に至り、そうした傾向の亢進に危機が感じられ、様々な形で大学の知的共同体としての一体性の必要性が再認識されるようになった。

東大の大学としての変容は概ねこうした近代大学の変容を擬似的に辿った。擬似的というのは、出発点からして東大は人間の全人的陶冶を意識することのない専門学校の連合体であったし、少なくとも戦前までは実質的に国家官僚の養成を一つの目的としていた[52]。ドイツ起源の近代大学の理念とは相い

れないものがあった。同様に東大本郷キャンパスは、対照例で見る限り、近代大学の変容の過程に対応した空間編成の変容を遂げてゆく。東大が対照例と異なるのは、そうした近代大学の変容に対応した空間編成の変容を、同一の場で順次経験したことである。

結果として、本郷キャンパスは、その変容を規定した宮殿形式の三つの適用形態をそれぞれ押し進め、その各々が個別的、または一体となって可能とする空間編成の形式を導き出した。その具体的な成果を、街区の形成が街区型建築の形成につながり、広場や街路などの都市的なオープンスペースの導入が「T字形式」とその体系的な適用へと展開したことに見ることができた。

対照例の欧米大学では各々個別に展開した適用形態が、東大では同一の敷地で展開したため、前段階で形成されつつあった編成形式が次の時代に具体的な存在として意識された。東大本郷キャンパスは欧米の近代大学の空間がおよそ一世紀にわたり個別に展開した空間編成の過程を、一連の過程として同一の場所で経験することによって、宮殿形式が規定する空間の変容を限界まで押し進め、内田期の建設としてその形を具体的に提示し得たのである。

6－2　宮殿形式と近代大学

この期の大学の空間編成の変容は、分析対象として扱った範囲では、その大学の歴史や理念、背景となる文化の違いを越え、宮殿形式という一貫した編成形式によって規定されてきた。先に見たように、東大を含め共通することは、この時期が基本的に大学の近代化とそのための空間の整備が集中的に行われた時期であること。従って宮殿形式が大学のこの時期の変容を一貫して規定したことの意味を問うためには、大学の近代化と宮殿形式の関係を見なければならない。

宮殿形式の基本的特徴を空間編成だけに絞ってまとめると次のようになる。

1)　大学の内部において、建物に囲まれたオープンスペースを中心とするまとまりが存在する。

2)　その大学内部のオープンスペースのまとまりが外部世界－都市空間と空間的に連続し、一体化する。

3)　大学の空間全体の中に連続的に拡張してゆく庭園的、空地的オープンスペースが存在する。

4)　各オープンスペース、建物が軸によって統合され、一体的な全体を形成する。

一方、本郷キャンパスの変容を見た80年間がその直中にあった19世紀後半から20前半にかけては、世界的に見て、近代大学の理念が普及し、体制が整備されていった時期に当たる。これは前章の冒頭で見たとおりである。19世紀の中葉ころから急激に広まった近代大学という制度は、それ以前の大学と異なり、学問－Wissenshaft, science－　を研究することを当然とし、その対象として実証的な自然科学を中心に新しい多くの学問分野を導入する。また産業革命を背景に大きく変動した社会体制は、それまでの一握りの特権的な職業人や教養人を養成するだけでない広範で高度な職業教育も大学に要請した。そしてこうした趨勢は、学問、ことに自然科学と技術が国益に直結するものとして大学の形成、整備に国家の意向を強く反映することになる。そして大学自身が国家の力を必要とするような状況も生まれる。　巨大な実験科学、実証的学問を支えることは多くの場合、国家の助力なしには困難になっていった。

以上のような状況は大学の空間が変容するに際し、次のような背景を形成した。近代大学は、

1)　急速な空間の成長、変化に対応しうることが必要であった。

2)　大規模化、専門化が進めば進むほど、大学としての一体性を必要とした。

3)　社会の広範な要請に応えることが大前提となり、社会すなわち外部世界とのつながりを重視した。

4)　都市を作る枢要な施設の一つとして独自の空間形式を必要とした。

宮殿形式はこうした要請に対応する空間の編成形式として現れた。

第一に、宮殿形式は、庭園という形で空間の展開が可能な相対的に大きな空地を備えていた。それは急速な変化成長に応えられる空間的な余地となったのである。

第二に、宮殿形式は前庭という一つのオープンスペースを個々の活動を収容する建物で囲むことにより、大学内部の中心、一体性を表す共同の場、オープンスペースを形成できた。

第三に、宮殿形式の前庭は、都市空間に開かれ、あるいは直結するオープンスペースでもあった。大学の一体性を形成するオープンスペースそのものが開かれていることは、優れて社会に開かれた大学という要請に応えるものであった。

そして以上の三点に関わるオープンスペース、すなわち庭園、前庭、都市空間は敷地全体を貫く一本の軸によって統合され、構内全体は外部に連続し、かつ一つの一体的な領域を形成した。

第四に、宮殿形式はそれまでの大学空間の代表的な空間の編成形式であった中世起源のクワドラングルに対し、建物・敷地が形成する大学空間としての一体性、都市空間を形成する壮麗な形態と規模といった点で比較すべきもなかった。国家の表現という点でもこれ以上の形式はなかったと言えよう[53]。

東大も基本的にこうした背景を共有していた。宮殿形式がその変容を規定したことは当然の結果と言えよう。ただ、空間の編成という点では日本独自の伝統があった。ことに大名屋敷の庭園的なオープンスペースと、門を通した内外の連絡という特性は、検討してきた三つの時期に程度の差はあれ、常に

現れていた。最後の内田期においてその体系の最も重要な、内外を結び、構内の編成の要となり基準となるものが正門を貫通する軸性であるという形で現れたと言える。

最後の都市空間の形成という要件は、本郷キャンパスにとっては実際ほとんど意味がなかったであろう。大学の周囲にはヨーロッパ的なスケールと形式をもってその形成に参加しなければならない都市環境などなかった。ただ国家的な意志と力の表現という点では、都市に自らを開き、示すことは重要な課題であった。

一参考文献等

全般

L. Benevolo, Storia dell'Architecttura Moderna, Guis. Laterza & Figli, 1973 [L.ベネヴォロ、武藤章訳、「近代建築の歴史」、鹿島出版会、1978]

L. Benevolo, Storia della citta, Editori Laterza, 1975 [佐野敬彦訳、「図説　都市の世界史·3」、相模書房、1983]

Anthony Blunt, *Art and Architecture in France 1500-1700*, Perican Books, 1953

Wolfgang Braunfels, *Abendlandische Stadtbaukunst Herrschaftsform und Baugestalt*, DuMOnt Buchverlag, 1976　[W.ブラウンフェルス、日高健一郎訳、「西洋の都市」、丸善出版社、1986]

A. Heckscher, *Open Spaces The Life of American Cities*, The Twentieth Century Fund, 1977 [A.ヘックシャー、「オープンスペース」、鹿島出版会、1981]

Wend Graf Kalnein ,Michael Levey, *Art and Architecture of Eighteen Century in France*, 1972

香山壽夫、「建築形態の構造ーヘンリー·H·リチャードソンとアメリカ近代建築」、東京大学出版会、1988

大谷幸夫、「空地の思想」、北斗出版、1979

C.N.Schuluz, *Baroque Architecture,*, Electa-Milano, 1979

C.N.Schuluz, *Late Baroque and Rococo Architecture,*, Electa-Milano, 1979

C.N.Schuluz, Genius Loci, Editoriale Electa-Milano, 1979 [C.N.シュルツ、加藤邦男他訳、「ゲニウス·ロキ」、住まいの図書館出版局、1994]

C.N.Schuluz, *Existence,Space and Architecture*, 1971 [同、加藤邦男訳、「実存·空間·建築」、鹿島出版会、1973]

大学一般

Franco Cardini, M.T.Fumagalli Beonio-Brocchieri, *Antiche Università d'Europa*, 1991

Richard Dober, *Campus Planning*, Reinhold Book, 1968

Richard Dober, *Campus Design*, Willy &sons, 1992

H.G. Gadameretc., *Die Idee der Universität*, Springer-Verlag, 1988[H.G.ガダマー他、「大学の理念」、玉川大学出版部、1993]

Steohen d'Irsay, *Histoire des universités françaises et étrangéres des origines à nos jours*, A.Picard, 1933–1935 [S.ディルセー、池端次郎訳、「大学史」、東洋館、1988]

D.Lenglart, A. Vince, *Universités, Ecolès Supèrieures*, Le Moniteur,1992

島田雄次郎、「ヨーロッパの大学」、玉川大学出版部、1990　(至文堂、1964)

H. Rashdall,*The Universities of Europe in the middle ages*, Oxford U.P., 1895　[H.ラシュドール、横尾壮英訳、「大学の起源」、東洋館、1966]

Konrad Rückbrod, *Universität und Kollegium Baugeschichte und Bautyp*, Darmstad, 1977

Paul Venable Tuner, *Campus,An American Planning Tradition*,MIT Press, 1984

日本

天野郁夫、「日本的大学像を求めて」、玉川大学出版部、1991

宮本雅明、「日本の大学キャンパス成立史」、九州大学出版会、1989

文部省、「学制百年史」、帝國地方行政学会、1972
永井道雄、「日本の大学－産業社会にはたす役割」、中公新書、1965
同、「大学の可能性」、中央公論社、1969
中山茂、「帝國大学の誕生」、中公新書、1978
日本建築学会計画委員会·空間·研究小委員会、「キャンパス外部空間論」、1993年度建築学会大会（関東）建築計画部門　研究懇談会　資料、1993
佐藤譲、「日本の学校建築」、文教ニュース社、1996
菅野誠、佐藤譲、「日本の学校建築」、文教ニュース社、1983
稲垣栄三、「日本の近代建築－その成立過程」、鹿島出版会
藤森照信、「日本の近代建築」、岩波書店、1993
堀越三郎、「明治初期の洋風建築」、南洋堂書店、1973　(1928)
工学会、「明治工業史·建築編」、丸善、1927
小野木重勝、「明治洋風宮廷建築」、相模書房、1983
鈴木博之、初田亨領編、「図面で見る都市建築の明治」、柏書房、1990
同、「図面で見る都市建築の大正」、柏書房、1992

ドイツ

Hans-Werner Prakl, Sozialgeshichte des Hochschulwesens, Kösel-Verlag, 1978 [H. V. プラール、山本丈訳、「大学制度の社会史」、法政大学出版局、1988]
潮木守一、「近代大学の形成と変容」、東京大学出版会、1973

アメリカ

A. Bloom, The Closing of the American Mind, Simon & Schuster, 1987 [アラン·ブルーム、菅野盾樹訳、「アメリカンマインドの終焉」、みすず書房、1988]
Earnest L. Boyer, Colleges:The Undergraduate Experience In America,Harper & Row, 1987 [E. ボイヤー、喜多村和之訳、「アメリカのカレッジ·大学」、リクルート、1988]
金子忠史、「変革期のアメリカ教育」、東信堂、1984
Clark Karr, The Uses of the Universities, Harvard University Press, 1963 [クラーク·カー、茅誠二訳、「大学の効用」、東京大学出版会、1966]
中山茂、「大学とアメリカ社会」、朝日新聞社、1994
潮木守一、「大学と社会」、第一法規、1982

イギリス

V.H.H. Green, The Universities(British Institutions Series), Perican Books, 1969 [V.H.H. グリーン、安原義仁他訳、「イギリスの大学－その歴史と形態」、法政大学出版局、1994]

東京大学関係（この項のみほぼ年代順になっている　括弧内は所蔵者）

本郷構内全体配置図（東京大学施設部　以下施設部）、M13.以降
東京帝國大学土地建物調（施設部）、M30.以降
「大学一覧」－東京帝國大学一覧、東京大学一覧、医学部一覧・明治19-20年以降－

（図書館、大学史料室、図書館資料室、医学部図書館）
河東義之編、「ジョサイア·コンドル建築図面集」、中央公論美術出版、1980
新営工事設計図書類（施設部）
新営工事記録写真類（施設部）
工科大学写真（建築学科歴史研）
小川一真、「東京帝國大学」、明治33年（建築学科、小石川植物園）
同上、「東京帝國大学1904」、明治37年（明治新聞雑誌文庫）
各学部卒業記念アルバム－法科、医科ほか（大学史料室、医学部図書館など）
震災アルバム－英文、震災前後比較記録写真帖－（附属図書館史料室）
震災被害調査記録写真（建築学科図書室）－約600枚、東大関係20枚前後
各建物等写真乾板
－ガラス乾板約 3､500枚（施設部、大正末期以降撮影）
概略の分類整理済み
内田祥三関係資料（都公文書館、大学資料室）
－東京帝國大学工学部所属建物略設計図、大正12年5月
－震災前の「整備計画」の一端
－東京帝國大学法、文、経所属建物略設計図、大正12年5月
－東京帝大復旧計画　其貳　学内決定案迄、大正12年10月案
－復興計画、大正12~13年、大正12年10月、11月案
－「図書館復興計画」、大正13~14年；当初二案あり。
－内田座談会記録（昭和43年）
－各種構内写真
東京都公文書館、「内田祥三資料目録一」、1989
同、「内田祥三資料目録二」、1995
内田図面（建築学科図書室）
内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会、「内田先生作品集」、鹿島出版会、1969
竣工写真類（施設部、附属図書館史料室）
竣工記念写真帖－大講堂、図書館、工１号館（施設部、建築学科）
各種記録写真（図書館、大講堂他）ほか構内写真（紙焼数十枚）
「東京帝國大学医学部病理学教室50年史」（図書館）
「東京帝國大学医学部法医学教室53年史」（図書館）
東京帝國大学、「東京帝國大学50年史」、昭和7
東京大学出版会、「東京大学その百年」、東京大学出版会、昭和35
小寺武久、「東京大学及び構内建築物を中心とした近代建築史」、昭和35年度東大建築学科卒業論文
東京大学医学部百年史編集委員会、「東京大学医学部100年史」、東京大学出版会、昭和42
「東京大学の百年」編集委員会、「東京大学の百年1877－1977」、東京大学出版会、昭和52
東京大学百年史委員会、「東京大学100年史」、東京大学出版会、昭和59～
岸田日出刀、「大学の建築に就いて」、帝國大学新聞、T13.12.15
同、「建築家として、大学将来への希望」、帝國大学新聞、T14.6.5
内田祥三談話、「感想六つ」、帝國大学新聞、T14.7.6－大講堂竣工時の談話
同、「調和に苦心した、耐震と便利と」、帝國大学新聞、T15.1.1

「新図書館の設計大要成る」、同紙、T14.11.2
「道遠き旅に、講堂と図書館が」、帝國大学新聞、T15.1.1
柘植芳男、「建築界の現状」、帝國大学新聞、S15.12.15－戦時統制下の建設活動
同、「実現の歩進む」、東京大学新聞、S23.1.22－文教地区構想
柘植芳男、「建築アラカルト・本郷篇」、東京大学新聞、1982.4.27～1982.12.14 連載
「本郷キャンパスの将来計画」、東京大学新聞、S50.1.1
東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編、
「東京大学本郷キャンパスの百年」、東京大学総合研究資料館、1988
寺崎昌男、「プロムナード東京大学史」、東京大学出版会、1992
貝塚爽平監、「東京都市地図・1」、柏書房、1995年

ベルリン-Humbolt University, Berlin
Klaus-Dietrich Gandert, *Von Prinzenpalais zur Humbolt-Universität*, 1985

ボローニャーBologna University
G.Bernabei etc, *Bologna Moderna 1860-1980*, 1984
Gian Paolo Brizzi etc., *L'Università a Bologna*, 1988
Roberto Finzi, *Comune,Provincia,Università* 1987

ケンブリッジ- New Museum Site, Downing Site
C. Brooke, R.Highfield,W. Swaan, *Oxford and Cambridge*, 1988
Nikolaus Pevsner, *The Buildings of England-Cambridgeshire*, 1954(1991)
R. B. Pugh, *A History of The County of Cambridge and The Isle of Ely*,1959 (1967)
Tim Rawle, *Cambridge Architecture*, 1985
Robert Wills, John Wills Clark, *The Architectural History of the University of Cambridge*, 1886(1988)
R.C.H.M.E., *City of Cambridge*, 1959(1988)

ソルボンヌーLa Sorbonne
Paule René-Bazin, *La Sorbonne*, 1974
Philippe Rivé *La Sorbonne et sa reconstruction*, 1987

ローマーRome University "La Sapienza"
Luciano Cupelloni, *Restaurare il Moderno,Il Caso della Città Universitaria di Roma*, ,"Bollettino di Dipartimiento Anno 6,Numero Speciale" ,199312
Silvia Danesi,Luciano Patetta, *Il Razionalismo e l'Architettura in Itaria Durante Il Fascismo*, Edizioni La Biennale de Venezia, 1976
G. Pagano, *Registro* (dell 'Università di Roma) , "Casabella", 6, 1993.01.

テキサス・オースチン-Main Campus・Historical Core
Margaret C. Berry, *Brick By Golden Brick-A History of Campus Building At The University of Texas At Auatin: 1883-1993*, 1993
Margaret C. Berry, *UT Auatin Tradition and Nostalgia*, 1975

Physical Plant Department-Architectural and Engineering Services 所蔵
キャンパス全体配置図
The University of Texas, *Request for Qualifications for Campus Master Plan*,1994
The University of Texas , *Campus Master Plan*, 1994
Theo B. White , Paul Philippe Cret-Architect and Teacher, 1973

ハーバード-Harvard Yard, North Yard
Margaret Henderson Floyd, *HARVARD-An Architectural History*, 1985
Harvard Archive所蔵ヤード全体配置図
同上所蔵全体配置計画図

ベルリン工科大学
Michael Bollé, *Der Campus*, Willmuth Arenhövel, 1994

ストラスブール大学
J.Euting, *Le Guide* Illustrè de *la Ville de Strasbourg*, Bastion, 1903, 1994

マドリード大学
Victoria Tovar, *Enciclopedia de Madrid-Arquitectura civil*, Ediciones Giner, 1988

謝辞

本論文は、多くの諸先生、諸先輩の助言、関係機関のスタッフの方々、私の研究室の助手、学生の皆さんの協力に負っている。ここに衷心より謝意を申し述べさせていただきたい。

ことに東京大学建築学科の香山壽夫教授には、論文の基礎となる重要な多くの助言をいただいた。また、もし先生の叱咤激励がなければこの論文は完成することはなかったと思う。柘植芳男先生には、戦前のキャンパスのことや営繕活動などについて貴重なお話をうかがわせていただいた。建築学科の藤井恵介助教授には、具体的で有益なご教示をいただいた。東京大学施設部、ことに調査掛長、中島一雄氏には資料の閲覧と調査に際し、多くの便宜をはかっていただいた。欧米の諸大学の関係者の皆さんにも様々な便宜を与えていただき、大変ありがたかった。ことにテキサス大学オースチン校のMr. Sidney J. Sandersには、二度にわたる調査の際、多忙にもかかわらず多くの時間を割いていただいた。

研究室の助手である野上恵子さんには、多くの図版作成をお願いし、論文とりまとめの最終段階を乗り越えることができた。研究室の大学院生、学部学生の皆さんにも同様に多くの協力をいただいた。

もともと、本郷キャンパスに関する研究をまとめることになったのは、本郷キャンパスの再開発計画に参加したことがきっかけである。その後、建築学科の私の研究室で行った大学に関する調査研究やそのときの研究室での議論も一つの基礎となった。また、東京大学キャンパス計画室より欧米の大学の調査に派遣していただいたことも大きな刺激となった。こうした様々な機会に恵まれることになったのも、香山先生から本郷キャンパス再開発計画への参画の機会をいただいたことから始まる。重ねて、香山先生には感謝申し上げます。

1996年12月25日

岸田　省吾

[1]大学キャンパス論の中で、香山壽夫は大学の根源的な空間が、コミュニケーションのための空間であることを説いている。（香山壽夫、大学計画に関する覚え書き、「SD」no69 P.7,10、1970年7月）

[2]大谷幸夫は、都市における空地の意味について、それが既知のものでないものを受け入れ、引き起こす可能性があるという点から論じている。大学におけるオープンスペースも、こうした「空地」としての意味が大きいと考えられる。（大谷幸夫、「空地の思想」、1979、P.200~205）

[3]複合用途の超高層ビルに収容された大学、あるいは都市内の小規模建物に分散した大学がある。これらの例では「一定の広がりを持つ敷地」や「建築群」などの概念はなじまないように思われるが、大学の空間－実態として大学の主要な活動に使われる空間。所有していなくてもよいーに見られる公共的な空間は広義のオープンスペースとして考えられることができる。

[4]こうした空間の二つの側面に関する議論として、場所の構造として空間と性格を挙げるC.N.シュルツがいる。（ゲニウス・ロキ p.27、p.28～30）本論で言う特性はシュルツの挙げた物体的な形態にみる特質の他、さらに空間の使われ方なども含んだものであり、K.リンチがディストリクト（地域）の特徴として定義したものに近い。（都市のイメージ、丹下、富田訳、p.84）本論のオープンスペースを規定する諸特徴は、そこでいうディスクリクトのテーマに該当する。（同書、p.84）

[5]都市空間など大きなスケールの空間認識では、明確に把握されている「場所」に対して、その「地」としてあらわれる「比較的構造化されていない区域」と定義される。また、「質的な限定を受けた区域を『領域』と呼ぶ」という定義もあり、これに近い。（C.N.シュルツ、実存・空間・建築、加藤邦男訳、p.56）本論ではオープンスペースの一定の編成形式がつくる空間のまとまりが議論の中心であり、オープンスペースやその編成形式のまとまりを簡潔に表現するため、広い意味で領域と言う言葉を用いることとする。

[6]こうしたオープンスペースのまとまりの階層構成は、建築形態について香山が述べた形態要素と構成形態のなす関係に近いものと考えられる。（香山壽夫「建築形態の構造－H．H．リチャードソンとアメリカの近代建築」、P.14～17）

[7]「園」とは、もともと囲われている一定の領域のことである。西欧中世の"hortus conclusus"（鎖されし庭）の様々な表現を通し、閉じられた空間という共通性がみられることが指摘されている。（横山正、透視画法の眼、p.68）

[8]カレッジクワドラングルの歴史的な起源としては、一つには修道院建築の形式が指摘される。礼拝堂、食堂、寝室、厨房・貯蔵庫など基本的要素が共通である。使われ方としても学寮では教育、訓育が主となり、修道院は信仰、労働が主となる違いはあったが、共に共同体の生活が基本にあった。（Konrad Rückbrod, *Universität und Kollegium Baugeschichte und Bautyp*, p.114, Tim Rawle, *Cambridge Architecture*, p.72）一方、イギリスの場合、中庭型に発展した貴族のカントリーハウスの形式というもう一つの起源の指摘もある。学寮の多くがカントリーハウスの持ち主が設立したものであり、その習熟している建築を反復したと言われている。今日でも当時の中世的大家族が機能している点など、共同体の面影を残している。（Willis & Clark, *Architectural History of the University of Cambridge*, Vol:3, P.266, マーク・ジルアード、英国のカントリーハウス・上、P.130）

[9]独立建物にする理由としていくつかの点が指摘されている。第一に広大なアメリカの風土が壮大な計画のヴィジョンを要請した。第二に火災の延焼を防ぐことができた。第三にピューリタンがカトリックの修道院を思わせる閉ざされた形式を嫌っ

た。第四に、ピューリタンはカレッジが地域社会·コミュニティの一部であるという感覚を重視した。第五に、カレッジが元々は相互に独立した組織であった。（P.Tuner , *Campus*, p.27 ）

[10]都市宮殿（palazzo,hotel）と田園住居（villa,chateau）が17世紀世俗建築の主要なビルディングタイプであった。イタリアにおけるvilla　suburbanaを嚆矢として、17世紀には、両者を総合するガーデンパレスが現れる。例えばPalazzo Barberini, Palai du Luxembourgなど。後者はヴェルサイユなどバロック期のヨーロッパ大宮殿の原型となった。（C.N.Schurtz, *Baroque Architecture* , p.14~16）

[11]たとえば、ケンブリッジ大学病理学教室1927年、ボローニャ大学解剖学教室1907年、東京帝國大学病理学教室　1904年。また、本郷キャンパスにおける宮殿形式の普及には、日本に19世紀半ば以降移入されたネオバロック「宮殿」の「両翼型」が影響与えたと思われる。大阪造幣局（1871、ウオートルス）、工部大学校（1877、ボアンビル）など。

[12]設計に当たって、ジェファーソンが1780年代に滞在したパリにおける新しい病院、Hotel-Dieuのプランに関する議論があったことが指摘されている。（P.Turner, *Campus*, P.76）そこではヴァージニア大学に見られるように独立的なパヴィリオンが連結されていた。

[13]P.Turner , 前掲書, P.47

[14]P.Turner , 前掲書, P.47

[15]東京大学百年史、東京大学医学部百年史、小寺武久、「東京大学本郷キャンパス及び構内建築物を中心とした近代建築史」、東大建築学科昭和35年度卒業論文、藤井恵介、「東京大学の誕生」他「東京大学本郷キャンパスの百年」所収の一連の論文

[16]東京帝國大学五十年史、東京大学百年史、小寺武久前掲論文、前掲東京大学本郷キャンパスの百年

[17]以下とくに必要な場合以外、東京大学（発足時）、帝國大學、東京帝國大學、東京大学（新制）は区別せず、東京大学ないし東大と記す。又、分科大学と学部の表記についても、とくに区別の必要がある場合を除き、学部で統一する。又、表記自体、学部を省略し、一文字（例えば法科大学は法、工科大学は工など）で行う。

[18]東京大学100年史、寺崎昌男、「プロムナード東京大学史」、中山茂、「帝國大学の誕生」、平石直昭、「東京大学ー現状と課題」中の歴史

[19]以下の資料を基礎とした。東京大学百年史、東京帝國大学五十年史、小寺武久「東京大学及び構内建築物を中心とした近代建築史」東京大学建築学科昭和35年度卒業論文、藤井恵介「東京大学の誕生」他、東京大学本郷キャンパスの100年

[20]油絵は岸田日出刀によるが、年代はこれまで考えられていた昭和11年頃より早い時期に描かれたものである。昭和6年発行の医学部の記念アルバムに掲載されている。このアルバムにはこれまで知られていなかった病院の配置計画が併せて掲載されており、震災直後の三案と実施された最終案の間をつなぐものと考えられる。なお柘植氏によるとこの絵が二枚存在するらしい。

[21]東京大学100年史、東京大学本郷キャンパスの100年などに見られる見方。

[22]鈴木博之、「スクラッチ・タイル・ゴシックの系譜」東京大学本郷キャンパスの100年、p.16~

[23]コンドル、工部大学校着任；1876- 明治9年　東大在籍期間；1886－明治19年~1888－明治21年

[24]例えば寺崎昌男は明治7年医学校本郷移転決定から明治21年の工科大学本館竣工までを第一次キャンパス形成期とする。（寺崎昌男、「プロムナード東京大学史」、P.17）また、藤井恵介は時期の区分は明示しないものの、本郷キャンパスの骨格が明治26年、理科大学・動物学等が竣工しできあがったとしている。（東京大学本郷キャンパスの百年、P.66）

[25]平面図、M11年。公文録

[26]発表誌（*The Builder*,1884.12.）には計画の作成年代はM12（1889）と記されているが、法文の着工がM13であり、それ以前であることは確実である。法文の配置はこの計画案と全く違うと思われるので、法文の設計時期より前でないとつじつまが合わない。

[27]コンドルがこの案を立案した少し前（1873）、師に当たるウィリアム・バージェスはトリニティカレッジの計画案を作っている。コンドル案は開かれた前庭、中央母屋の強調、個々の独立した建物が完全にシンメトリーなど異なる点多い。また、工部大学校（アンダーソン、ボアンヴィル設計、M10年、図3－7~9）の両翼型の配置は、施設内容と年代が近いこともあり、関係が少なくない思われる。

[28]コンドルは当時を回想し、文部省から委嘱され東大の基本構想（scheme）を立案したこと、最初の二棟の建物が自分のデザインに従って実施されたこと、三つめの建物は辰野が設計したことなどを述べている。（建築雑誌402号、P.63、1920）実際の竣工年は設計年の順となっていない可能性があるが、二つめの建物はおそらく法文と並んで建った理・博物と思われる。いずれにせよコンドルの述懐から判断すると、草創期の建物配置はコンドル周辺で検討され、コンドルの東大全体計画を踏まえ立案されたと思われる。

[29]東京大学の配置計画を立てる時点で既に医学校以来の校舎、病院、寄宿舎、理学部の観象台、音楽取調掛（後の芸大音楽学部）、教師館などの建屋が散在し、最初の一手の場所は限られていたことが影響したことは明らかである。その中で、法学部については、大学綜理の扱いにも窺えるように、医学部と並び大学組織を二分する一方の雄として正門の正面に近い場所がふさわしいと判断されと想像される。また工科大学が大学南校以来の理学部を差し置いて法文とともに正門背後の前庭を形成したことは、当時、理学より実学に近いという点で学内外で重視されたこと、主だった計画主体が工部大学校ー工科大学の関係者であったこと、理科大学の計画が工科より先行し、計画立案の時点で利用できたまとまりある空地が現在の理学１号館の場所に限られていたことなどが影響したのかもしれない。

[30]なおこのように全体を見通すが眼が弱くなっていったことは、計画の主体がコンドルー辰野の工科大学教官から営繕に移っていったことと関係が少なくないと思われる。

[31]列品館はＴ12年6月着工、大正12年5月4日法研、同28日列品館増築配置図あり

[32]岸田日出刀、「大学の建築に就いて」、帝國大学新聞、Ｔ13年12月15日

[33]ちなみに、内田はＴ10年に任東大教授

[34]ちなみに、講座数をほぼそのまま反映していると考えられる教官数（教授、助教授、助手）の数を見ると、T6からT11までの５年間に、399人から570人に激増している。（教授49人、助教授54人、助手68人合計171人の増加。大学百年史資料より）この時期の前後は比較的安定している。

[35]東京帝國大学復旧計画略図－復旧予算参考資料、T13年1月10日

[36]医学部明治40年卒25周年記念アルバム、昭和6年

[37]東京帝國大学復旧計画略図－復旧予算参考資料、T13年1月10日

[38]元施設部長柘植芳男氏談

[39]無論、欧米の大学がはるかに長い伝統と、産業革命を背景とした大きな社会的な変動に対応していった変革の過程であったことを考えれば、同列に論じられないであろう。しかし多様な領域の学問研究、専門教育のための理念、制度、組織などが模索されたことにおいては一致する点も少なくない。

[40]そうした計画は、コンドルの東京帝国大学計画案（M12（1879）年）を除いて他には考えられない。注26参照

[41]厳密には各建築に内包された裏的な空間である光庭を数えれば３領域。これはバスクール（キッチンコートや馬車コートなど、サービス用の中庭のオープンスペース）などを含み始めた18世紀以降のオテルなどの宮殿形式により近い。

[42]この節は以下の文献を参照した。ラシュドール、「大学の起源」、ディルセイ、「大学史」、島田雄次郎、「ヨーロッパの大学」、中山茂、「帝国大学の誕生」、「アメリカの大学への旅」、潮木守一、「近代大学の形成と変容」、「大学と社会」、皇至道、「ブリタニカ百科事典大学の項」、ヴィヴィアン・グリーン、安原義仁他訳、「イギリスの大学」

[43]神学、法学、医学、教養諸科（哲学）の４学部のこと

[44]村上陽一郎、「文明のなかの科学」、P.60

[45]約１万人強（1850）から３万人強（1900）へ。（潮木守一、「近代大学の形成と変容」、P.163）

[46]V.H.H.グリーン、安原義仁他訳、「イギリスの大学」、P.290、島田雄次郎、「ヨーロッパの大学」、P.264

[47]島田雄次郎、前掲書、P.262

[48]大学によって与えられた名称ではないが、便宜のため、イルネリオ通りに面し、大学施設のみが展開する一団の敷地を、その中で最も古い建物の名称を持ってヴィオラ地区とした。

[49]Paule Rene-Bazin, *La Sorbonne*, P.25

[50]これはケンブリッジ大学などに見られる閉じられたクワドラングルが断片化され、開放的に変形されたものと考え、オープン・クワッドと呼ぶことにする。

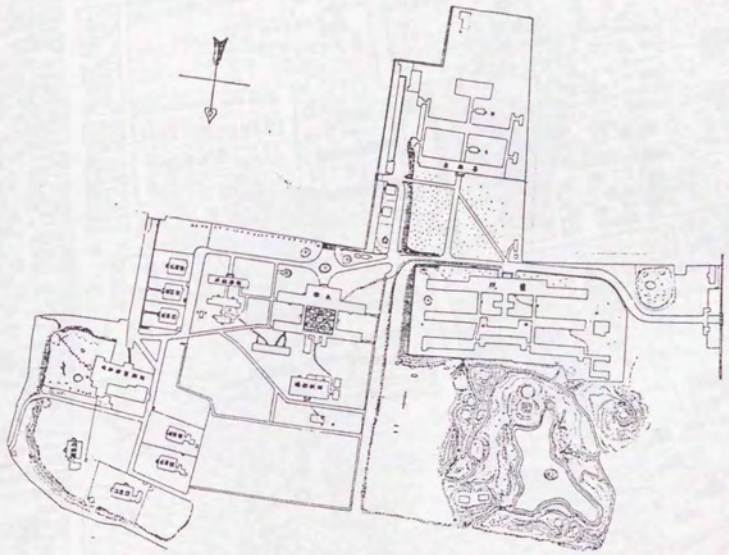
[51]２章で見たようにこうしたアメリカ的大学空間の典型的な形式はプリンストン大学　ナッソーホールに見られる。それは田園の中に孤立する建築の原型と言えるもので、建物の形式性（軸の貫通性、中央の強調と両翼の突出など）は宮殿形式に見られる建築形態と類似する。が、一体となった連続的な田園のオープンスペースが基本であり、そのため軸性も弱められている。全体としてオープンスペースの編成形式としては宮殿形式ではない。

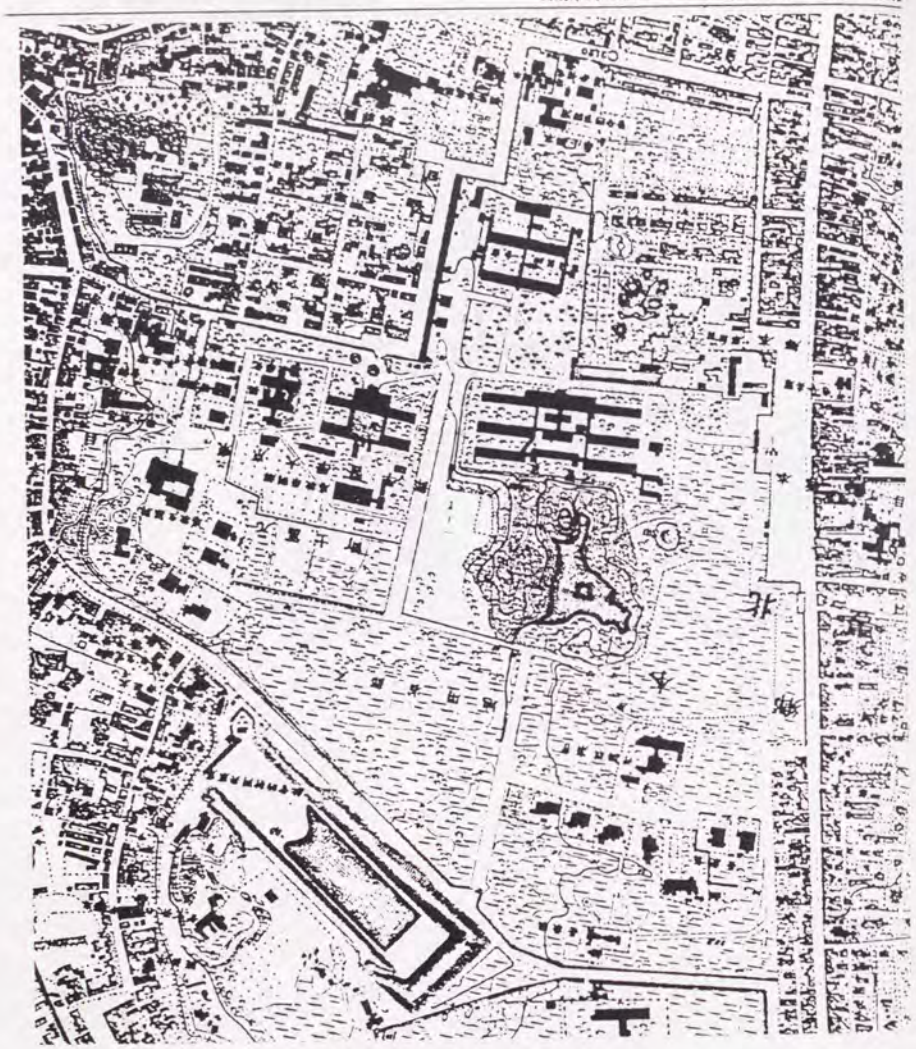
テキサスでは、配置の形式は、基本的にオープンスペースの軸と中心による体系に従い、大規模な構内全域はUTタワーに結びつけ、それを中心として統合されていた。キャンパスの一体性は、第一にこの配置形式による。しかし同時にそれは構内全域を共通の基盤として覆うグリーンがもたらす一体感にも依存している。建物はほぼ例外なく周囲の可能なところはすべてグリーンがとりまき、たとえ街路に面している建物でも街路から少し後退して配置され、街路との間は植栽が施される。変容の過程もこの一体的に連続し、拡張してゆく田園的オープンスペースを形成するためのものであったと言える。

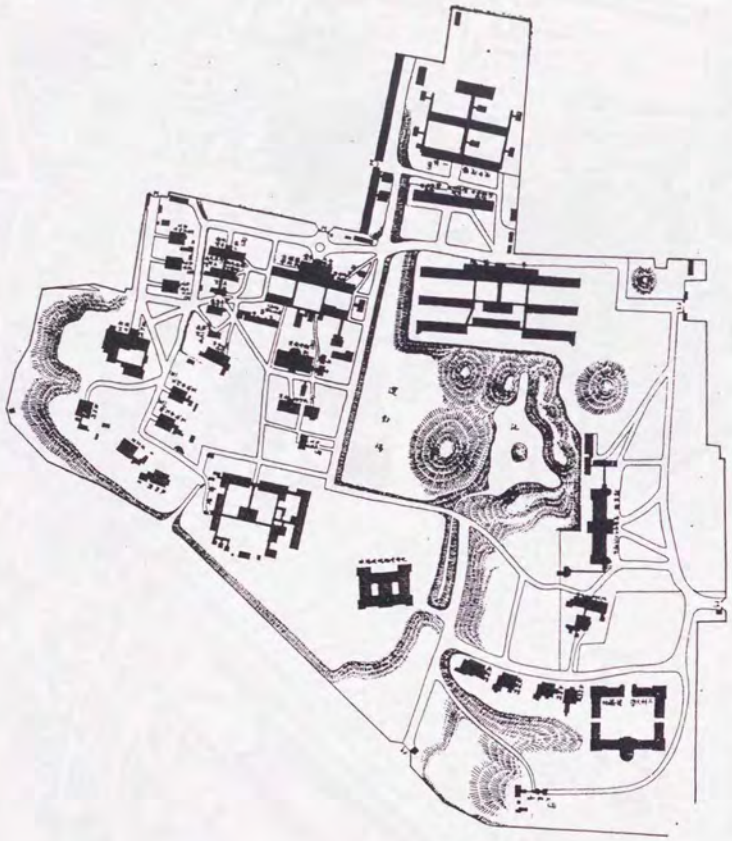
こうした変容における特徴はハーバードでも見られた。ハーバードはテキサス大学とは設立の目的も運営主体も、専門分野の特色も元々大きく異なる上、配置形式も、テキサスのボザール的な軸の体系に対しヤードシステムと呼ばれるコロニアル期以来のものであったが、その違いを越え両者共に田園的な特性のオープンスペースが存在することは一貫している。

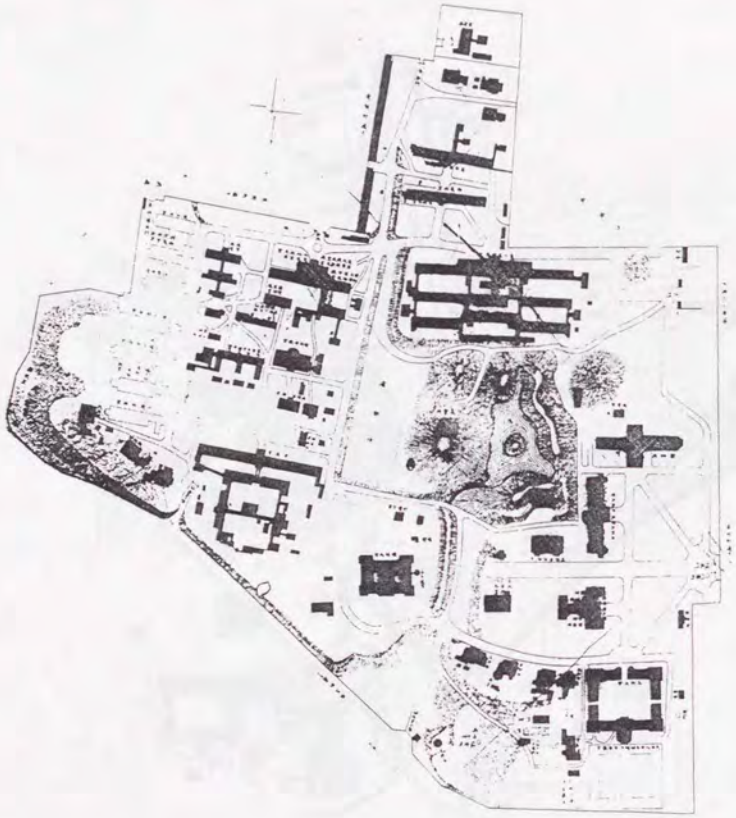
[52]当時の日本政府の考えはドイツの大学をモデルとするのではなく、法科官僚制の形成が目的であった。帝國大学の法科はその一環として重要視された。（中山茂、「帝國大学の誕生」、p.62～）

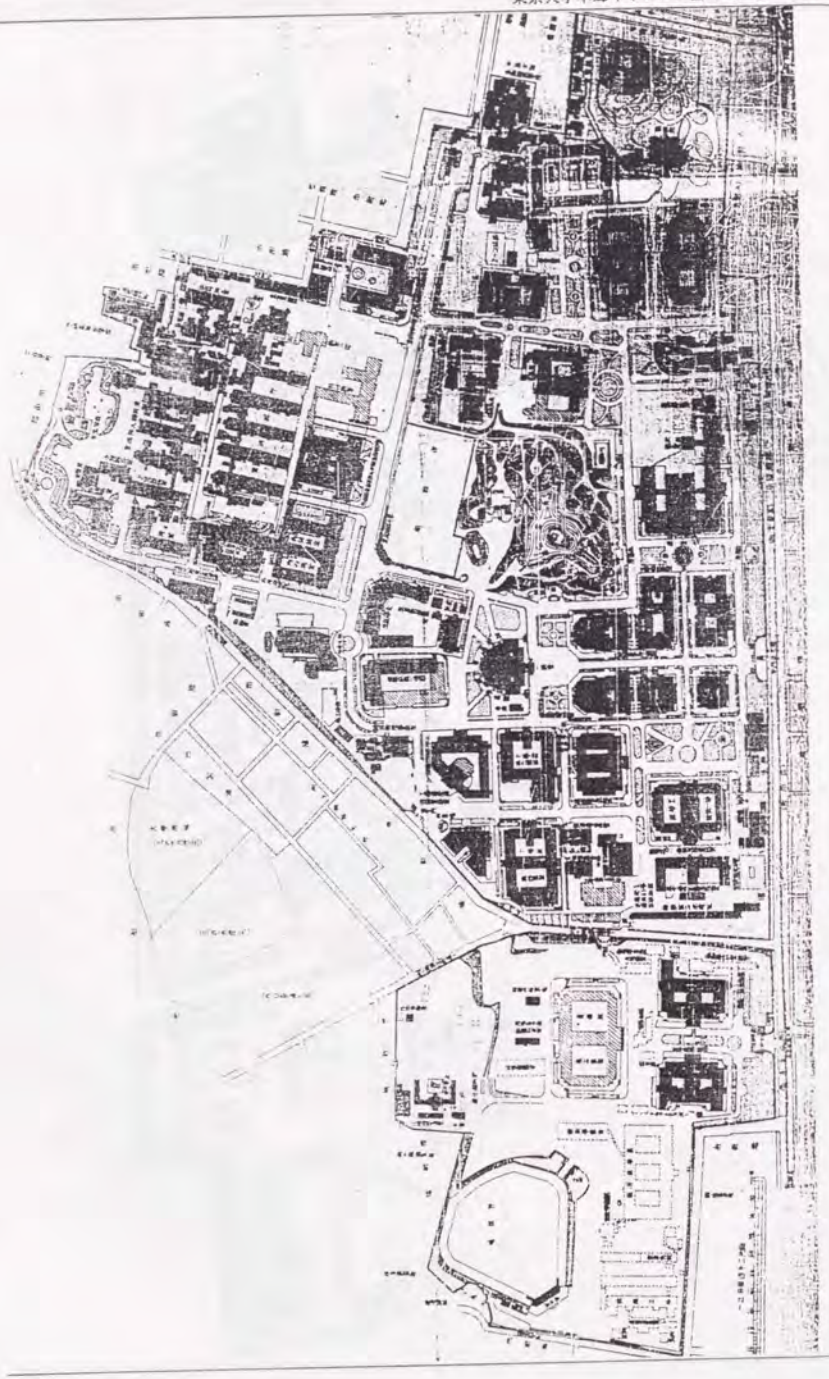
[53]18世紀以降、多くのヨーロッパの都市にヴェルサイユ宮殿に模した宮殿が建設され、その顔となったように、大学は19世紀中葉以降、ヨーロッパの首都の都市改造に際し、しばしば宮殿形式で作られ、首都を飾る枢要な施設となった。ウンターデンリンデン通りに面する皇太子宮殿を大学に改装したベルリン大学を嚆矢とし、ウィーン大やバルセロナ大、パリ大・ソルボンヌなど。

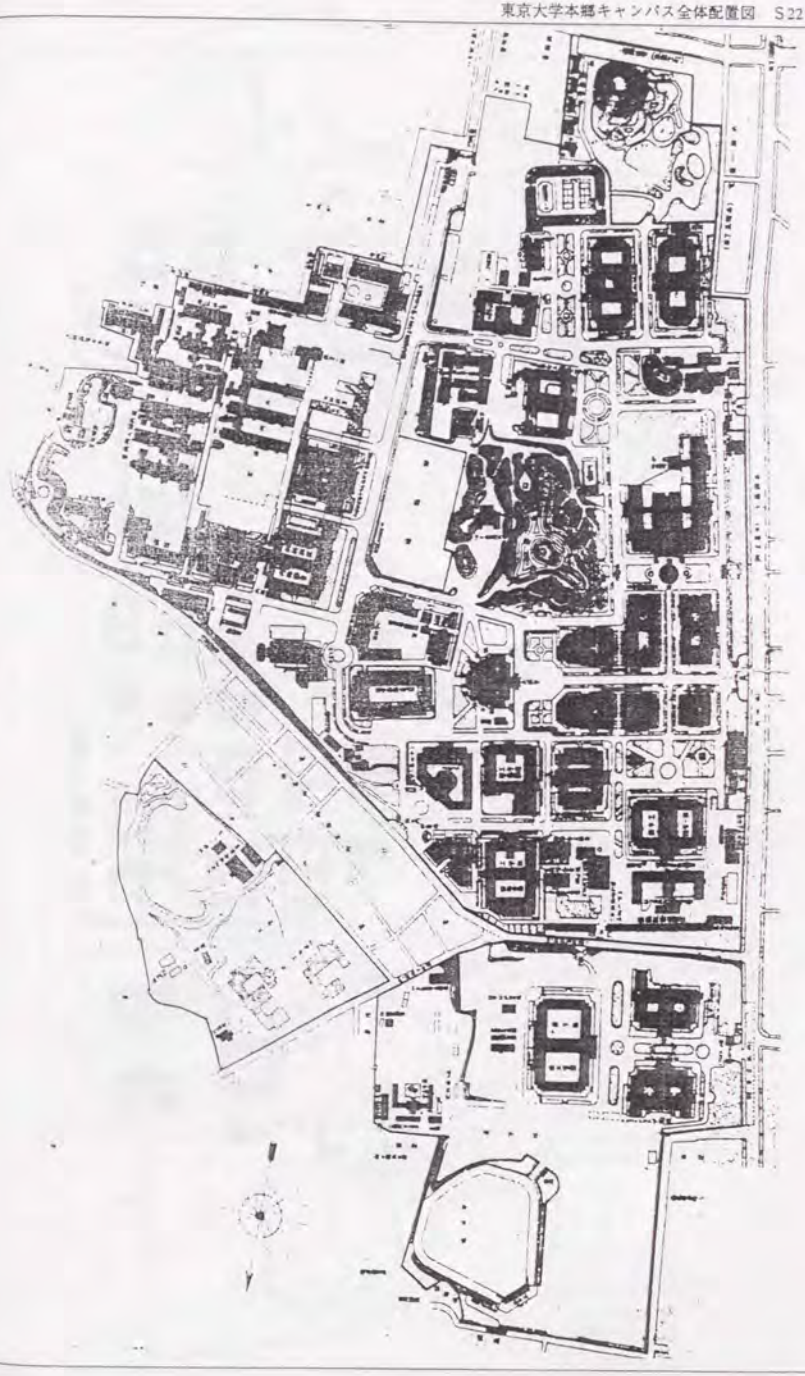






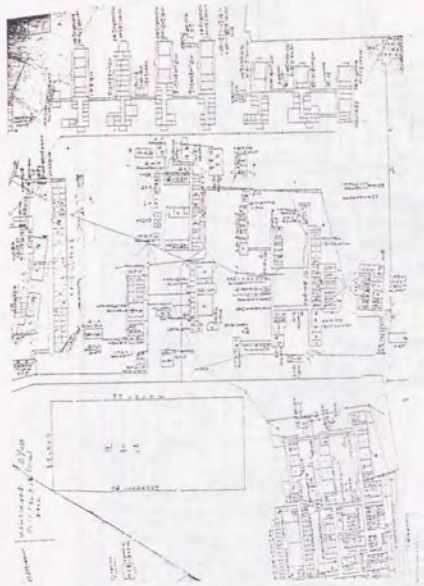




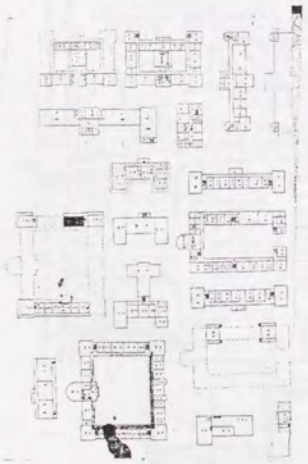


東京大学本郷キャンバス全体配置図　S34　TK18

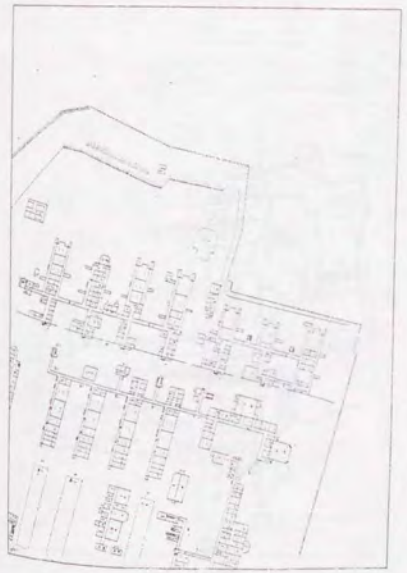
東京大学本郷キャンバス全体配置図　H7　TK19

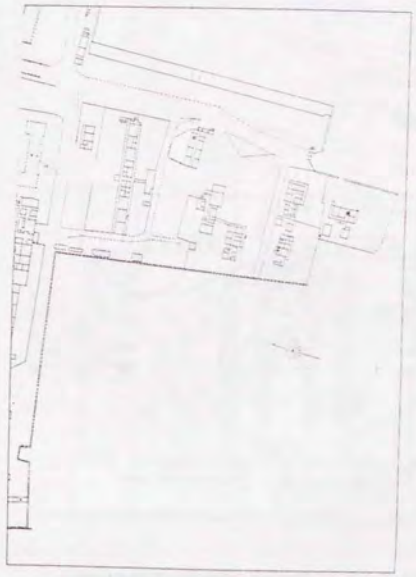


「帝國大学建物全体配置之図　第一の二」M30年９月16日写

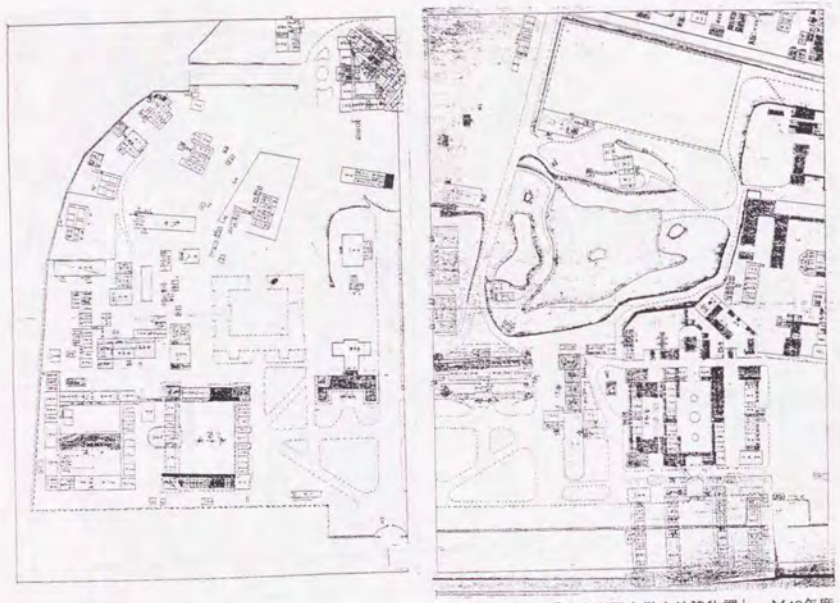


営繕掛、「東京帝國大学土地建物調」、M36年9月改

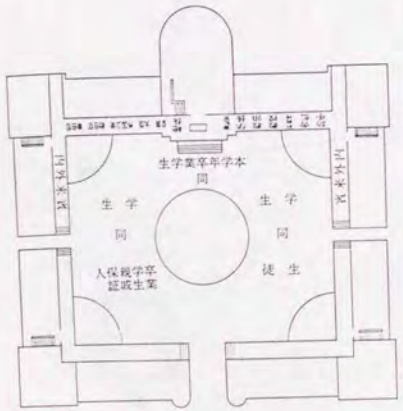




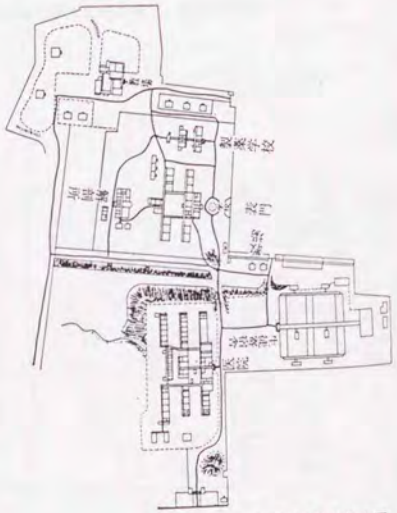
営繕掛、「東京帝國大学土地建物調」、M36年9月改



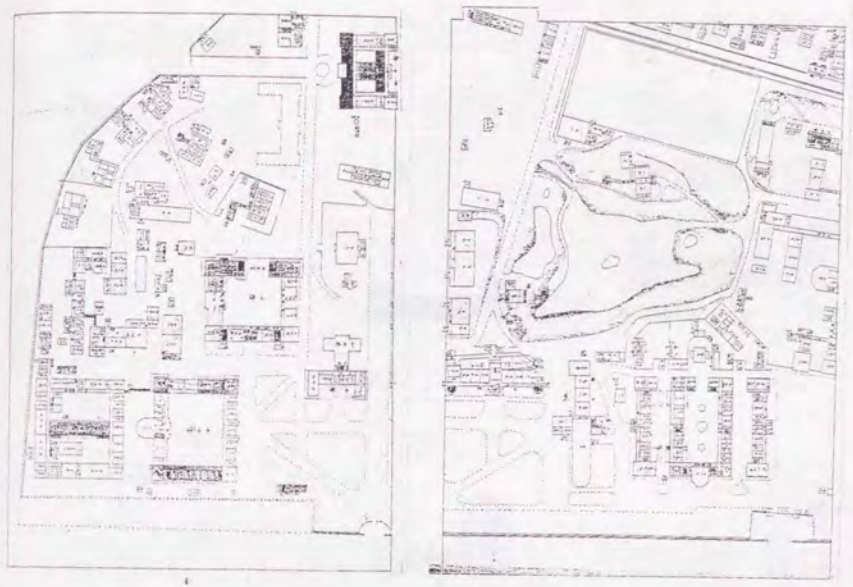
営繕掛、「東京帝國大学土地建物調」、M40年度

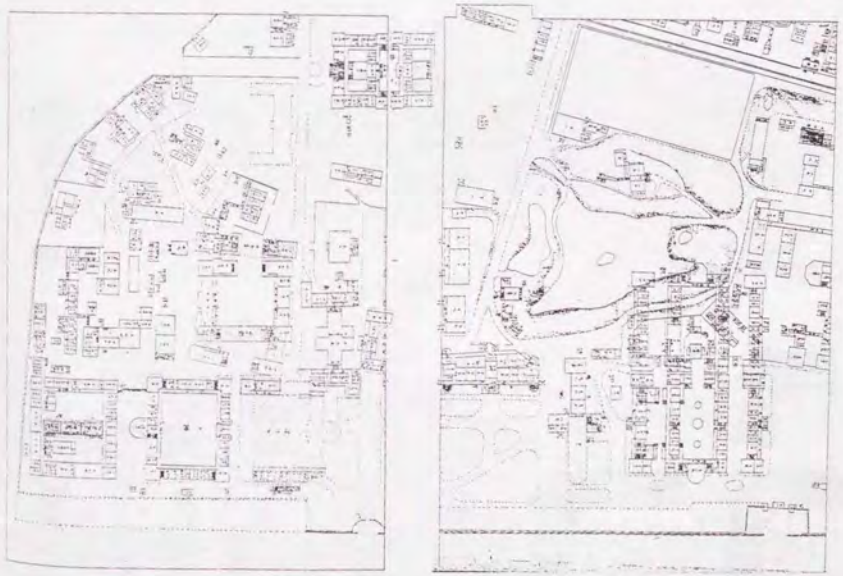


帝國大学卒業式式場図
(M22年7月7日、百年史・資料一、P.993)

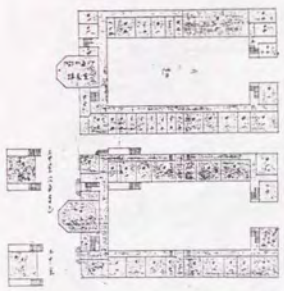


東京大学医学部開業式案内図
(M12年3月5日、百年史・資料一、P.1025)

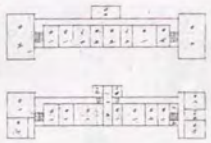




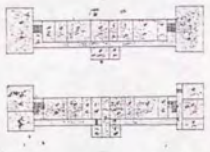
営繕掛、「東京帝國大学土地建物調」、M42年9月



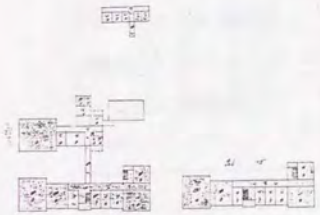
医・生理、医化学



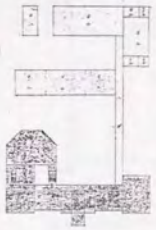
医・薬物



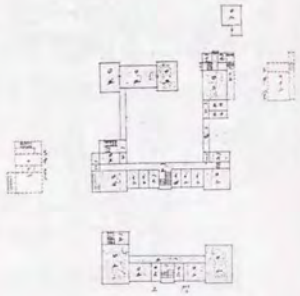
医・衛生



医・法医



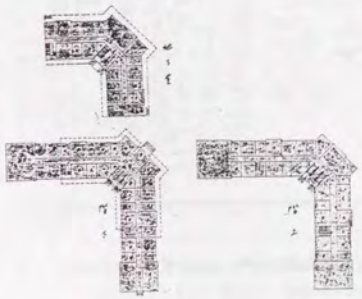
医・解剖



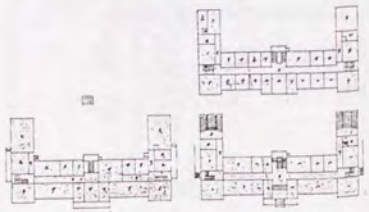
医・病理

薬学

理・本館

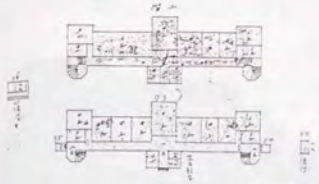


理・化学



理・動物、鉱物、地質

無題綴（理大学の増築状況よりT9~12年の調べと推定される）

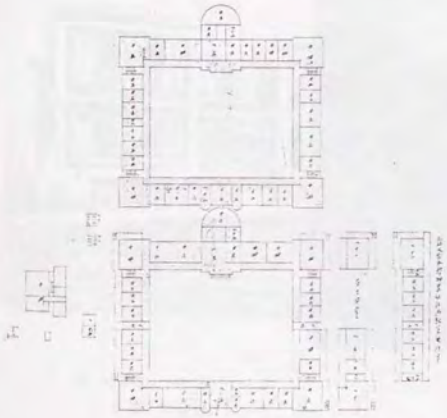


法文

法文・研究室

法・教室

図書館



工・本館

工・実験室

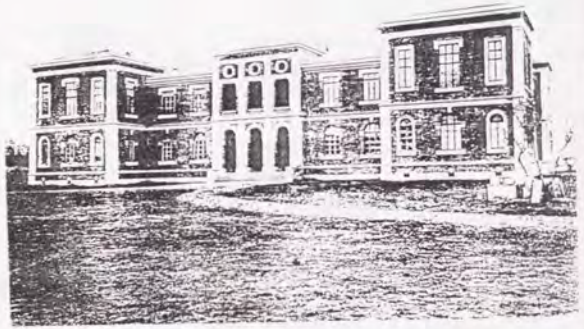
工・造船、造兵、土木

工・応化、採鉱冶金

無題綴（理大学の増築状況よりT9~12年の調べと推定される）

法文（右）と工各科大学（左奥）
M20年代（五十年史）

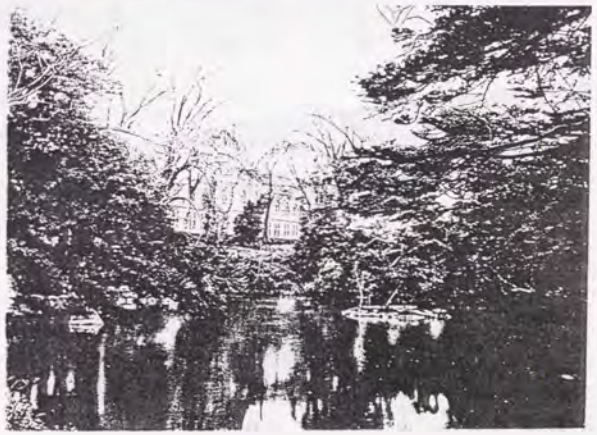
理・本館、M20年代（五十年史）工・本館



M20年代（五十年史）

御殿下運動場、M20年代（五十年史）

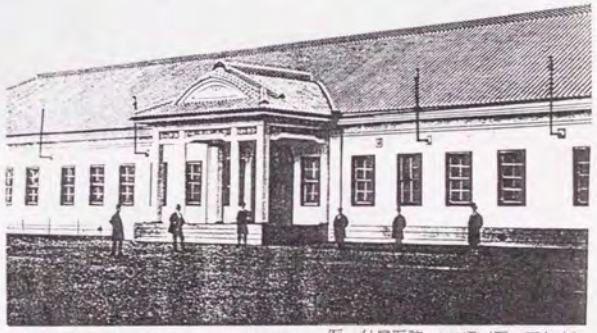
育徳園庭園、M20年代（五十年史）



理・観象台、M20年代
（百年史・部局史三）

赤門、M20年代（五十年史）

医・本館、M14頃（堀越三郎、明治初期の洋風建築）



医・付属医院、M9頃（医・百年史）

運動場越しに木造時代の医学部を望む（医・百年史）

木造時代の医・病理

同生理、解剖など

医・本館

M43頃の医・本館（病院）周辺（百年史・部局史二）